

# 明久と違法研究所と召喚獣

夏の大三角形

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第1作品目も投稿する目処が経っていないのに新しい作品を作ってしまった作者の夏の大三角形です。

この作品では明久が女の子になっています。苦手な方はブラウザバックしてください。これからも作者の夏の大三角形をよろしく願います

# 目次

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |      |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 第1問 | 第2問 | 設定。 | 第3問 | 第4問 | 第5問 | 第6問 | 第7問 | 第8問 | 第9問 | 第10問 | 第11問 |
| 1   | 6   | 11  | 15  | 23  | 32  | 38  | 44  | 53  | 60  | 68   | 82   |

|      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| 第12問 | 第13問 | 第14問 | 第15問 | 第16問 |
| 97   | 102  | 107  | 113  | 124  |



# 第1問

第三者 set

? 「はあはあ」

暗い夜道を誰かが走つていく。白色の髪で長さは背中まで伸びていて、瞳の色は紅く、猫の耳猫尻尾が生えている女子だった。

その女子の名前は吉井明久。原作では男子で鈍感でバカな高校生だが何故こうなったのだろうか。

明久「よかった。誰も追つてきて無い。」

明久「あそこに居たらこの後どんな実験をされるか分からない。だから見つかる前に早く家の中に入らないと。」

そう言つて吉井明久は家の鍵を開けて中に入つていった。

先程の独り言からわかるように彼は——いや今は彼女か——何処かの研究所に捕まり人体実験を施されていたようだ。

第三者 set out

雄二 set

あのバカが居なくなつてから約2ヶ月経とうとしているが一向に行方が分からない。まあ底は警察に任せておけばいいとして流石に家の中を定期的に片付けなければいけないから今日今から行つて、片ずけるとするか。

ガチャ

「ん？おかしい先週末の時はしつかり鍵をかけたはずだ。ここの鍵を持つてるのは俺かあいつかあいつの家族のみだから空いてるはずがない。一応警戒しとくか。」  
警戒しながらリビングまで行くとそこに人がいた。猫耳と猫の尻尾の生えた女がいた。

「誰だ！」

雄二 set out

明久 set

？「誰だ！」

ビクッ

突然大声を出されて僕はビククリしてその声が出た方を見ると雄二がいた。

何で雄二がここに？そんな疑問が頭の中に駆け巡る。いや、分かりきったことだ。昨日の夜帰ってきた時家の中はかなり綺麗だった。多方雄二が片付けてくれたのだろう。

「雄二?」

明久 set out

雄二 set

その女は俺を認識すると俺の名前を呼んだ。

「何故俺の名前を知っている?」

? 「ごめん。こんな姿になつてるから分からないよね。明久だよ。僕は吉井明久。」

俺が質問をするるとこの女は自分を明久だと言ってきた。

確かによく見れば面影はあるが明久は男だ。だがこいつは女だ。

「明久だと? 明久は男だぞ?」

雄二 set out

明久 set

「うん。男だったよ。約2ヶ月前までは。」

そうして僕はこれまでのことを説明した。

雄二が疑問に思うのも無理は無い僕は男だったのだから。

雄二 「約2ヶ月前まではだと?」

「うん。僕は約2ヶ月前に家に帰るために歩いていたら後ろからハンカチを口に当てられた。よくある刑事ドラマみたいに人を攫うために犯人が薬品を染み込ませてその薬

品を吸わせて眠らせるやつ。」

雄二「ああ。」

「まんまそれだったよ。そして気を失って起きたらベットに拘束されていた。そして薬品を注射で打ち込まれた。そして体に途方も無い激痛がはしってそれが収まると女になつていた。」

雄二「まだそこまでは分かる。いや。理解はできる。だが何故お前に猫耳と猫の尻尾が生えている？」

「そこまでは理解はできたんだ。かなりありえないことだらけだったと思うんだけど。まあいつか雄二だし。」

「うん。その後また薬品を打ち込まれたんだ。世の中には獣人が居るでしょ？その獣人の血液を使って作られた薬品を打ち込むことで猫の耳や尻尾が生えた。そして僕を女の子にしたのは僕の仮説だけど獣人にする薬は女の子にしか効かないからだと思つたんだ。」

雄二「なるほど。分かった。だがなぜお前は帰つて来れた？」

まあ。聞いてくるよね。急にいなくなつて急に戻つてきて話を聞いたらそんなことになつてたとは思わないし。」

「うん。その実験が終わつたあと牢屋みたいなところに入れられたんだ。そこで寝ろつ



て言われて。そして牢屋に入っしてしばらくまあ昨日の朝ぐらいまで過ごしてただけど昨日の朝人が尋ねてきたんだ。」

雄二「人が？」

「うん。大体二三十代の男の人が。そしてその人が僕に聞いてきたんだ。ここから出た  
いか？つて。その問いに対して僕は出たといって答えた。まあ当然だよ。そしたら。  
その人が今日の夜に逃がしてやるつて言つてきたんだ。そして昨日の夜その人が逃が  
してくれて研究所から逃げ出した。」

雄二「そうか。」

明久「そしてその後追つてがないか確認しつつ家まで帰つてきて。そのまんま疲れて  
鍵も掛けずに寝てしまつて今に至るつて感じかな？」

雄二「OKだ。理解した。だが何故見た目がアルビノみたいになっている？」

「ストレス」

雄二「分かった。取り敢えず秀吉たちには俺から伝えておく明日にでも来るから今日  
はゆっくり休んどけ。」

「ありがとう」

## 第2問

雄二 set

あいつが寝たのを確認してから俺は家に帰った。

秀吉たちにも状況説明をしないといけないからな。さて。めんどくさい事になったな。どう説明したものか。こんな馬鹿げてると言つてもいいような内容を信じる可能性も低いし。

ん？　そう言えば前になんかのニュースでそんな記事を見た事がある気がするぞ？  
てことであいつらを呼び出すか。

ピリリリリリリ

？　「、、、どうした？　雄二。」

こいつは土屋康太通称ムッツリーニだ。

「明久が見つかった。ただ。色んなことが起り過ぎていて電話じゃ説明しきれないから今から俺の家に来てくれ。後、今から送るURLに乗ってるニュースも見といてくれ。」

康太「、、、分かった。」

「この後秀吉にも連絡するから切るぞ。」

プツ

ピリリリリリリ

？「どうしたのじゃ？雄二よ。こんな時間に電話なんてかけて来おつて」

この後

次に連絡をしたのは秀吉だ。性別は男だが見た目は女にしか見ええずFクラスでは第3の性別と言われているやつだ。

雄二「明久が見つかった。ムツツリー二にも連絡はしたが今ここで説明しきることが出来ないから俺の家に来て欲しいそこで説明する。」

秀吉「わかったのじゃ。明久はどうしておるのじゃ？」

雄二「今は疲れてしまったのか寝ている。起こすのもあれだから家の鍵を閉めて来たから大丈夫だと思う。」

秀吉「わかったのじゃ今からお主の家に行けばいいよじゃな？」

雄二「ああ。」

秀吉「じゃあまた後でなのじゃ」

プツ

さてこれからどうしていくか。学校の間もあいつのみ家にいさせて何かがあつても困る。だが、学校に行くにしても見た目が違いすぎるし何より動物の耳と尻尾が人離れし

すぎている。そこに関しては明久と話し合うしかないか。

ガチャツ

雄二「お袋ただいま。」

？「おかえり」

今返事をしたのが俺のお袋である坂本雪乃だ。

雄二「ああ。この後秀吉たちも来るから来たら俺の部屋に行くように伝えてくれ。」

雪乃「わかったわ。」

雄二「ありがとな。」

さてアイツらが来るまでに情報を纏めておくか。

1つ目アイツが誘拐されたのが2ヶ月前、2つ目今日俺があいつの家に行ったらソファアでアイツが寝ていた。姿がかなり変わっていて言われるまで分からなかったが。3つ目アイツはどこかの研究所に連れ去られ人体実験を受けさせられた。4つ目昨日の朝何者かがアイツに接触し外に出るかを聞いた。そして夜に鍵を開けアイツを逃がした。

雪乃「雄二。秀吉くんたちが来たわよ。」

雄二「おう。じゃあ俺の部屋に来てくれ。」

康太「、、、分かった。」

秀吉「分かったのじゃ。」

雄二「じゃあ今から説明するがこれは誰にも話さない方がいい。かなりやばい事になつてそうだ。」

秀吉「どんなことなのじゃ？」

康太「、、、それが俺に調べさせたものと関係があるのか？」

雄二「ああ。」

そして俺は今日の朝にアイツの家に掃除をしに行ったことやそこで見たもの、聞いたものを全て説明した。

秀吉「そんなことがあったとはのう。」

康太「、、、信じられない。」

雄二「ああ。俺も最初は信じられなかったが実際に見て話したからこそそれが事実だと思つた。アイツは馬鹿だがそういうことに關してだけは嘘をつかない。」

それだけは言い切れる。アイツは馬鹿だ、だけどそんな事で嘘はつかない。喧嘩や誰かのために何かをやったりはするけどもこんな事で嘘はつかない。

雄二「明日の10時にアイツの家に行くんだが、お前らも来るか？」

康太「、、、行くに決まっている。」

秀吉「当然じゃ。」

雄二「わかった。じゃあ明日の10時にアイツの家の前に集合だ。」

秀吉「うむ。」

康太「、、、ああ。」

そして今日はここまでで解散した。

## 設定。

吉井明久 今作品の主人公。原作では馬鹿な彼だが今作品では違法研究所に捕まり人体実験が施された所を謎の人物に助けられた。

性別 男↓女

身長 158cm

体重 53kg

見た目、特徴 白くて腰まで伸びた髪に髪と同じ色の猫の耳と尻尾がある。瞳の色は赤色で傷がかなり治りやすい。骨折程度なら一瞬で治ってしまう。(薄桜鬼の羅刹と似たような感じ。分からない人は検索してみてください)

性格 原作とは少し違い敵と認識した人には容赦なく攻撃をするが仲間に関しては何があっても守ろうとする。切れた時は口調がなぜかは分からないが、女性っぽくなる。中学の時に雄二達と一緒にソードアート・オンラインの世界に囚われていた経験があり、使っていたソードスキルは元々は片手剣ソードスキルを使っていてコンプした後には刀ソードスキルからのユニークスキルで抜刀術並びにエクストラスキル飛天御剣

流、全集中の呼吸があつた。

能力、技 (人体実験が施されたことにより色々な能力が使えるようになった。) 投影魔術、小聖杯、飛天御劍流、牙突、気配を消すこと並びに感じることに、四人の精霊と契約してその能力が使えるようになることと自信に憑依させるかその場に化現させることが出来るのと精霊武装その精霊特有の武器を貸してもらい戦うことが出来る、(サラマンダー・斧シルフ・刀ノーム・大剣、ウインディーネ・槍)、(契約しているのは火のサラマンダーと岩のノームと水のウインディーネと風のシルフ。容姿はノームとウインディーネは少し大人な感じの美女でサラマンダーとシルフは子供っぽさが残る美少女。色々な人に優しいからこそ精霊たちも心を開き力を貸している。) 耳と尻尾の一時的な認識、接触ができなくなることに。全集中の呼吸、刀ソードスキル、抜刀術ソードスキル

点数

全科目500から600点越え。

腕輪・羅刹化、固有結界、リンクスタート、サーヴァント召喚の中から選んで使える。謎の人物に助けられたあと追っ手が来なかったのは出来に関しては実験の中ではかなりいい方だが能力に関して望んだものでは無かったことからそれ以降の接触を必要としないと判断されたため。

坂本雄二

明久が家に帰ってきたあと一番最初に発見した。今作品の主要人



物の1人。原作では明久と仲がいいが、互いに喧嘩?をしまくっている仲。だが今作品ではかなり明久に優しくなっている。

性別 男

身長 180 cm

体重 75 kg

見た目 原作どうり

点数 358から429点

木下秀吉 今作品の主要人物の1人。(今はこれ以上書けません。)

性別(秀吉より他の人は全て省略します。原作どうりなので気になる方は検索してみてください。)

点数 347から411点

土屋康太

(以下略)

点数 354から419点ただし保健体育に関しては学年代表をも超える点

数を取る。

謎の人物

明久を逃がした人物詳細はよくわかっておらず違法研究所から攫われた人を逃がしたりしている。この後の登場は予定しており、明久の味方として出す

予定。

姫路瑞希、島田美波。今作品のアンチ対象者たち。明久がほかの女子と話しているとおしおきと称して釘バットで殴ったり関節技を掛けたりする。島田に関しては明久が誘拐された島田研究所の所長である島田浩三（オリキヤラ）の娘であり親がどんなことをしているのかは知らない。一言で終わらせるならクス

#### 悪魔連合

悪魔たちのみで構成された組織人を襲い地上を冥界と同じく悪魔の住みやすい世界に変えようとしている

#### 島田研究所

悪魔に対抗するために人体実験を行っている

## 第3問

明久 set

明久「うーうーん。えーと。ああそうだ帰ってこれたのか。あの研究所からの追手はなさそうだね。多分あの牢屋に入れられた人は多分能力が望んでいたものじゃなかったのかな？」

それにしてもかなり酷い扱いだ。

明久「とりあえずシャワー浴びてご飯作ろう。この後雄二が来るはずだから。」

シャワーを浴びるためにお風呂場に向かいシャワーを浴びようとお湯を出したら猫の特徴なのかお湯にかなりびびりしてしまった。シャワーを浴び終わったあと着替えようと思ったら服を部屋に置いてきたみたいでタオルを首からかけて部屋に取りに行った。

明久「今何時だろう。」

明久が服を取りに部屋に行く途中に時間を確認しにリビングに向かったら10時になったばかりだった。

ガチャツ

雄二「明久。入るぞ。秀吉たちも来てるからな。」

明久「え？ちよ、ちよっと待」

つてと言おうとしたところで雄二たちがリビングに入ってきてしまった。

雄二「、、、なんつう格好してんだてめえは!!」

康太「、、、我が生涯に一片の悔い無し!!」

と言いながらムツツリーニは鼻血を出しながら倒れてしまった。

明久「さつきまでシャワーを浴びてて、服を忘れたから取りに来たところだったんだよ。てか、返事を待たずに入ってきたのはそつちじゃないか!!」

雄二「わかったからさつきと服来やがれ!!」

明久「分かってるよ!!」

そう言つて僕は服を着に部屋に向かった。時鏡から見えた僕の顔はみんなも予想ができるだろうけど恥ずかしさで真っ赤になっていた。秀吉は終始固まっていた。てか皆つて誰だろうまあ、いつか。

服を着た僕は皆がいるリビングに戻ってきた。

明久「さすがに返事を待たずに部屋に入るのはやめて。今は一応女だからかなり恥ずかしいんだからね?」

雄二「、、、すまなかつた。」

康太「……雄二が素直に謝ったぞ!」

雄二「ムツツリーニそれはどういう意味だ!!俺だつて謝る時くらいあるつっの!!」

明久「あんまり謝んないのは事実だけどね……、多分雄二から説明してもらつてと思うけどまあ。見ての通りかな?後はもうひとつ。この体になつて猫の耳と尻尾が生えただけじゃなくて他にも例えば色々な能力が使えるようにされてたりもするかな?」

雄二「そういえば学校はどうするんだ?」

明久「学園長と西村先生と高橋先生にのみ説明をしようと思う。対外的には誘拐されて監禁されたことによるストレスで容姿が変わつてしまつたつていう感じかな?性別に関しても先生に相談して男性として通えばいいし。」

今あげた先生たちは信用ができると思うからね。

雄二「いや。確かにそうなんだが耳と尻尾に関してはどうするんだ?」

明久「さつきも言つたけど色々な能力があるからその中の一つに耳と尻尾を隠せて自分でも触れることが出来なくするようにできるからそうすれば大丈夫だよ?」

雄二「わかつた。明日も休みだが学園長と西村先生と高橋先生は学校にいるはずだから明日説明しに行くとするか。」

明久「うん。そうだね。」

雄二「そういえば研究所のやつら今頃探してるんじゃないのか?」

明久「多分大丈夫だと思ふ。僕が入られてた牢屋は多分望んだ能力ではなかった人たちが入れられるんだと思ふ。この姿での検査の時研究者たちは最初かなり数値が高いつて喜んでたんだけど能力の検査をした時に速攻でガツカリした顔になつてたから。」

あの時の顔の代わり用は見てておもしろかつたな。

明久「だから。逃げられたとしても追つ手を送ることはないと思ふよ？送るつもりがあるならとつくに家の中にはいられて連れ戻さられてるはずだから。」

雄二「なるほどな。わかつた。ただ、一応すぐに警戒が解けるわけじゃないから今日から1週間だけここに3人とも泊まるぞ？お前らもいいか？」

あ。2人がいたのを話すのに夢中になつて忘れてた。

秀吉「構わんのだが姉上に連絡せんと行かんのと今の今まで僕たちのこと忘れておつただろう」

康太「、、、俺も問題ない」

雄二「忘れてないぞ？ただ話してる時にまぎれる内容がなかっただけの話だ。」

明久「一つだけ言うけど構わないんだけどかなり恥ずかしいからジーっと見たりだけはしないで欲しい。」

雄二「まあ。性別が変わってるから当然っちゃあ当然か。わかった。後荷物がないからこの後家に行つて取つてくるから10分くらい開けるが秀吉はここに残つて欲しい。」

なんで秀吉のみ残つてもらうんだらう。

秀吉「なんで僕のみ残るんじや？」

雄二「明久のみでいるともし追つ手が来た時にどうしようもなくなるからだ。木下姉に連絡して必要なものを準備するように手配して欲しい。俺がここに来る途中に取りに行く。」

秀吉「分かったのじや」

そういう事だったのか、ありがたいな。

明久「雄二ありがとう」

雄二「まさかお前にお礼を言われる日が来るとはな」

明久「さすがに酷いからね!？」

全く、でもこうして話してるとも戻つてこれたんだなって実感するな。

雄二とムツツリー二が衣服などの荷物を取りに行つてる間に秀吉と話したりしていた。

秀吉「まさかこんな事になるとは夢にも思わなかつたぞい」

明久「僕もだよ。こんな事になつてこれからどうするか考えたりもして色々大変だけど、それでも、雄二や秀吉、ムツツリーニが居てバカみたいな会話して帰つて来れて良かったしこういつた会話をして帰つてこれたつて実感ができた。」

秀吉「そうじやのう。」

明久「そういえば、今が6月だからもうすぐ学園祭かな？」

秀吉「そうじやのう。そういえば2人1組の召喚大会もあるのじやがお主はどうするのじや？」

明久「出たいかな。召喚戦争もできてないし観察処分者の仕事で召喚したりはしたけど召喚獣使つて戦つたりは出来なかつたからね。」

秀吉「そうじやのう、儂らはお主が帰つてきてくれて本当に嬉しく思つておる。これは本音じや。姿などは変わつてしまつてもお主はお主だと今分かつたからのう。」

明久「ありがとう」

こんな会話をできるのが本当に嬉しい。

明久「そういえばせめて部屋着などは女の子っぽいのを買わないとね。さすがにこの服はどうかと思うから。」

そう、僕が今来てるのは元々家にあるものだから必然的に男物になる。

秀吉「そうじやのう。しかし儂らは全員どんな物がいいのか分からぬからのう。」



明久「そうなんだよね。うーん。雄二に頼んで霧島さんを呼んでもらうのも一つの手かもしれないけどあんまり知ってる人を増やすのも危険かもしれないし。」

秀吉「霧島殿なら大丈夫じゃないかのう？」

明久「それもそうだね。」

そう言つて僕は雄二に連絡をした。

ピリリリリリリ

雄二「どうした？」

「明久「あのさあ。服の件なんだけど僕らはどんなのがいいとか分からないから霧島さんを読んで欲しいなつて思つて、秀吉と話してて霧島さんなら大丈夫だと思つただけど。」

雄二「あまりこういつたことを頼みたくないが分かつた。連絡しておく。」

明久「ありがとう」

雄二「じゃあまた後でな。」

明久「うん。」

プツツ

取り敢えずこれで大丈夫かな？後は明日学園長のところに行つて話をしたりしないとだけど取り敢えず今必要なことはこれで全部だから。

明久「秀吉。よりあえずみんなが戻ってくるまでゲームでもしてるよう。」

秀吉「そうじゃのう。戻ってくるまで10分くらいと言っておったが今の状態ではまだまだ時間がかかりそうじゃのう。」

明久「そうだね。」

そして僕らは皆が来るまででゲームをして時間を潰すことにした、取り敢えず何からやろうかな？新しいのもかなりあるし。

## 第4問

雄二 set

雄二「あまり頼りたくないんだがな。しょうがねえ、腹くくるか。」

プルルルルル

? 「、、、 何? 雄二。」

今電話しているのは霧島翔子。俺の幼馴染だ。

雄二「一つ頼みたいことがある。」

翔子「、、、 何?」

雄二「後で説明するから明久の家に来てくれないか?」

翔子「、、、 構わない」

雄二「助かる。」

翔子「、、、 その代わり、後でデート。」

雄二「分かった。」

そう。俺はあまりこいつを頼りたくない。何かの間違いか俺の事を好きになつてしまった。それから断つたんだが、何かと一緒にいたがる。正直俺より良い奴がいると思

うんだがな。

さて、これからどうなるのか。誰にも分からないんだが、、、問題は島田に姫路だな、あいつらは何かと理由をつけて明久に攻撃するからな。どうにかできるならしたいんだが、Aクラスに試召戦争を挑んで明久をAクラスに行けるようにするか、だが学力面が問題だ。そうこう考えているうちに明久の家の前に着いていた。

ガチャツ

雄二「戻ったぞ。」

明久「あ、雄二おかえり」

俺が戻ったら2人はゲームをしていた。

雄二「おう。何やってんだ？」

明久「スマ○ラ」

雄二「そうか。」

明久「雄二もやる？」

雄二「やるとするか。負けるつもりは無いけどな。そういえばお前学力はどうなんだ？」

明久「?どうしたの?急にそんなこと聞いて。」

雄二「試召戦争もやるから知っておいた方がいいなと思ってな。」

明久「そっか。テストはしてないから分からないけど多分かなり良くなってると思う。実験されてた時に今までだったら分からなかった問題が簡単にとけてたから。」

学力面は問題ないらしい。なら安心だ。

明久「そうだ、この後霧島さんとムツツリーニが来たらカラオケ行かない？少し歌いたい。」

雄二「そうだな。じゃあ車ではスマブラやって時間潰してるか。」

ガチャツ

雄二「つと、来たみたいだな。」

翔子「、、、雄二どうしたの？」

雄二「明久がいたんだが、まあ、見ての通りな感じになってな、服なんかは俺よりお前の方がよくわかってるから手伝って欲しくて呼んだんだ。」

翔子「、、、分かった。」

ガチャツ

雄二「おつ。ムツツリーニも戻ってきたみたいだな。」

康太「、、、取ってきた。」

雄二「じゃあ、カラオケ行くか。明久が行きたいらしいからな。」

明久「あつ」

雄二「どうした？」

明久「僕、お金が無い。」

そうだったな。確かこいつは仕送りをしてもらってるから行方不明になってるあいだは送って貰ってないからなくても仕方ないのか。

翔子「……、問題ない。」

雄二「どうしてだ？」

翔子「……、吉井の分は私だけです。」

明久「いいの？」

翔子「……、問題ない」

明久「ありがとう。」

—————

カラオケ

明久「さて何から歌おうかな。うーんじゃあコレかな？」

longing

「手に入れるよきつと♪」

「何処へ行けるのか

僕らはまだ知らない

産まれたばかりの翼を広げたら  
強く高く君は飛べる

憧れよ側にいてずっと」

「彼方に輝く星が導く場所へ

誰よりも早く辿り着くよきつと

世界がその手に

隠している光を

この手で暴いてみせるよ

今すぐ」

明久「ふう。」

雄二「かなり上手くなってるな。」

明久「ありがと。」

しばらく皆で歌ったあと

雄二「そろそろ服を買いに行くか。その後帰って明日ババア長と鉄人のところに行け

ばいいからな。」

明久「うん。そうだね。」

—————

服屋

明久 set

翔子「、、、吉井の見た目だったらコレとかがいいと思う。」

明久「ごめん、もっと他のなかったの？」

霧島さんが持ってきたのは青色のワンピースだったのだが少し露出がおおい感じだった。(サマードレス)

翔子「、、、似合うと思ったから。」

明久「ごめん、お願いだから他のにして。色はそれでいいんだけど露出が多すぎる。」

翔子「、、、分かった」

翔子「、、、じゃあコレ」

明久「分かった。コレはいい感じかな？ありがとう霧島さん」

持ってきてくれたのは露出が少なめの青色のドレスだった。

明久「じゃあこれにするね。」

翔子「、、、分かった。じゃあ買ってくる。」

そう言うのと素早く霧島さんは僕の持っていたドレスを取ってレジに向かっていった。今度なにかお礼しないとな。

翔子「、、、買ってきた。」



明久「ありがとね、霧島さん。」

翔子「、、、、苗字じゃなくて名前で呼んで。」

明久「えつと、翔子さん？」

翔子「、、、、それでいい。」

雄二「買い終わったか？」

翔子「、、、、終わった。」

—————

明久の家

明久「疲れた。」

これからの事を考えても意味ないんだろうけど、頭ではわかってても考えちゃうんだよね。

雄二 set

アイツは自分の弱さを相手に見せないからタチが悪いんだよな。普通に楽しかったりして笑ってたりもしたんだろうが、大半が貼り付けたような笑顔というか、周りに心配させないために笑顔を作ってた感じだろうな。

雄二「なあ。」

秀吉「何じゃ？」

康太「、、、どうした？」

雄二「今日のアイツを見てどう思った？」

今アイツは風呂に入ってるから聞くなら今だろうな。翔子は一旦家に帰って服などを取りに行ってる。

秀吉「そうじゃのう。無理に笑つてるというか、心配させないために辛いのを表に出さないように笑顔でいる。そう感じたのじゃ。」

康太「、、、俺も同じだ。」

やつぱりコイツらも気づいていたか。

雄二「やつぱり気づいていたか。そうだな俺から見てもそんな感じだったな。アイツは自分の弱さを相手に見せないようにするからな。それと同時にそれによって挫けなように自分でもそれを押さえ込もうとする。1回泣いてしまった方が楽なんだがな。」

明久「上がったよ。」

雄二「お前、そんなふうになってから1回か泣いたりしたか？」

明久「泣いてないよ？そんな暇もなかったしね。」

ここで1回思いっきり泣いておかないとコイツは何時か耐えられなくなる。

雄二「そうか。」

そう言つて俺は明久を抱きしめた。

明久「雄二？」

雄二「思いつきり泣け。今は俺らしいかない。」

明久「でも。」

雄二「でもじゃねえ。このままだとお前は辛い時にそれを表に出さなくて溜め込んでしまうだろうが。辛いことがあつたら泣くのは当たり前だ。それが人間つてもんなんだからな。溜め込んでるもん全部吐き出しちまえ。」

明久「うん。うう。なんで僕が、、、なんでこんな事になんないと、、、こんなふうになりたくなかつたのに、、、うああああ」

やっぱ溜め込んでたか。全くためこんでんじゃねえよ。全く。こいつらしいつちやあこいつらしいんだけどな。

翔子が戻つてきたらヤバそうだけど今回はしようがねえか。

## 第5問

明久 set

明久「うーん。今何時だろう。」

朝の5時

明久「あれ？なんでこんなに早く目が覚めたんだろう？まあいつか。取り敢えず顔洗ってどんな能力があるか確かめよう。」

確か、書いてあった通りなら

明久「投影開始」

パシッ

明久「できた。」

僕が今やったのは投影魔術。アニメの能力などを使えるようにされてるものもあるらしいから試して見たんだけどしつかりとアニメででてきた干将莫耶が投影されてる。

明久「他にもいろいろあるみたいんだけど、取り敢えず今日は投影魔術の特訓をしようかな？」

2時間後

雄二「うお！なんだこりゃ！」

明久「ごめん、能力が書かれた紙に乗ってた投影魔術の特訓をしてたんだ。」

雄二「そうか。その書かれてる紙ってのはどこにあったんだ？」

明久「逃がしてくれた人が逃げる前に僕に渡してくれた。」

雄二「なるほどな。」

取り敢えず着替えた方がいいかな？

明久「取り敢えず着替えてくるね？」

雄二「おう。今日の10時に学校行くからな。」

明久「分かった。」

使って見た感じではかなり使い勝手が良さそうだよな。投影魔術って。イメージさえ出来れば本物と全く同じものを作り出すんだからね。さて、私服でいいのかな？制服の方がいい気もするけど、まあいつか。

学校学園長室

雄二「よう。ババア長。話があるから鉄人と高橋先生も読んでくれないか？」

藤堂「あんたはホント毎回失礼な餓鬼だね。話っていうのは後ろにいる白髪の女子の

ことかい？」

雄二「ああ。」

藤堂「わかったさね。」

鉄人&高橋先生到着

西村「どうされましたか？学園長」

藤堂「そのクソガキたちが話があるみたいだから読んださね。」

雄二「じゃあ話すぜ。一昨日明久が見つかった。」

藤堂「どこに居たさね？」

雄二「俺が見つけたのは明久の家でだ。」

藤堂「だが、それとその女子はどういう関係があるさね？」

まあそこは普通に疑問に思うよね。てかそういえばあそこにいた時間が長くて気づいてなかったけど今週って三連休だったんだね。時間感覚戻さないとな。

雄二「今説明する。まあ、結論だけ先に言うところいつが明久だ。だが一昨日聞いた話だとかこの研究所に捕まっていたみたいなんだが逃がしてくれた奴がいたらしい。追手はなかったあったとしたらとっくに見つかってらるだろうしな。」

藤堂「何がどうなってそうなったさね？」

雄二「明久が言うは人体実験を受けたらしい。」

藤堂「わかったさね。それで、私たちに何をして欲しいさね？」

雄二「できる限りでいいから明久のサポートをして欲しい。人体実験を受けたことによつて見ての通りになったのと、かなり多くの能力を使えるようにされたらしい。どんな物があるかはコピーしてきた紙に書いてある。簡単に言うくと獣人にもされてるから普段は隠せてるが、ふとした拍子にそれがバレる可能性もあるから、それを誤魔化したりに欲しい。」

藤堂「分かったさね。他にサポートできる点はサポートするさね。」

雄二「助かる。それと、一応女子生徒として通うことになる訳だが、その辺をどうするかも話したくてきた。」

藤堂「そこは、女子になってしまったという子だけ説明するか形を取ればいいさね。」  
雄二「なるほど。それで行くか。お前は どうしたい？お前のことだ。お前の意見を聞く必要がある。」

明久「僕はそれで良い。」

藤堂「ここに書いてある能力の一つである投影魔術をあんたの召喚獣に使えるようにしていいかい？かなり性能のいい武器などは点数が必要になるけど、それ以外は例えば刀とか普通の片手剣だったり大剣は点数消費無しで使えるようにするさね。消費するとしたら、有名どころで行くと、ゲイ・ボルクなんかさね。」

明久「大丈夫です。何から何までありますがどうぞいます。」

藤堂「構わないさね。そうなつて一番苦勞居てるのはあんたなんだからね。先生たちもそれでいいさね?」

西村「構いません。吉井。これから色々大変かもしれないんが頑張れよ。俺らは精一杯フオローをする。」

高橋「そうですね。」

明久「ありがとうございます。」

—————

明久自宅

明久「コレでとりあえずはいまやることはすんだね。」

雄二「そうだな。」

秀吉「明日から学校に行く感じじゃから今日はのんびりしていいのでは無いかの?」

雄二「そうだな。今日はゆっくりしているか。」

明久「そうだね。色々ありすぎてゆっくりは休めてないからね。」

雄二「ああ。」

明久「明日からまた忙しくなるし。」

雄二「島田と姫路が面倒くさくなるだろうし、Fクラスの奴らもうざつたくなりそう



だ。」

明久「あはは。はあ。めんどくさい」

「多分前までの僕ならこんなこと言わなかったんだろうけどあの二人とはあんまり関わりたくないな、、、嫌いな部類の人間だし。何かと理由をつけて関節技をかけたたり釘バットで殴られたりするから。この体は幾らか頑丈みたいだけど流石にそこまでいくとやばそうだしね。」

雄二「お前が誰かに向かってそういうのは初めてじゃないか？」

明久「うん。なるべく言わないようにしてたんだけどね。さすがにそろそろ限界だから。」

雄二「そうか。取り敢えず今日はもう寝るか。話してたりでかなり遅い時間になってるからな。」

明久「もうこんな時間か。そうだね。おやすみ。」

雄二「ああ。」

秀吉「お休みなのじゃ。」

康太「、、、おやすみ」

## 第6問

明久 set

明久「ふわー。今何時？」

朝6時半

明久「まだ六時半なんだなら少しランニングしてこようかな？」

朝7時

雄二「あれ？あいつどこいったんだ？」

明久「ふうー。あ。雄二おはよう。ごめん、ちよつとランニングしてきてたんだ。」

雄二「そうか。さすがに心配するから置き手紙でもいいから置いてくれ。」

明久「うん。ごめん」

まあ、そうだよ。こんな状況で起きたらいなかったら何かあったんじゃないかって心配されてもおかしくないよね。

明久「それより、そろそろ学校行くの？」

雄二「ああ。みんなも起こして着替えたら学校行くぞ。」

明久「分かった。」

## 寝室

明久「みんな起きて。遅刻するよ？」

秀吉「明久。おはようなのじゃ。」

康太「、、、おはよう。」

翔子「、、、吉井、おはよう。」

明久「うん。皆おはよう。」

さてみんなも起きたし学校に向かおうかな？でも、、、クラスのこと考えると少し憂鬱かな？

明久「そういえば学園長たちはどう伝えるんだろう？」

雄二「さあな。まあ。大丈夫じゃねえか？俺が心配なのはそれよりもFクラスの奴らだからな、アイツらがお前を見た時に何をしでかすかわからんからな。」

明久「うん。そうだね、今から憂鬱だよ。」

Fクラスの皆は女子関連になると特にやばくなるからな。それ意外ととてつもなくヤバいけど。ん？そういえば今思ったけど投影魔術を使えるってことはサーヴァント召喚もできるのかな？あとでというか明日かな？やってみよう。

## 学校

福原「という事があり吉井くんの性別が変わってしまったがいつもと同じように接してあげてください。あと、急ですが今日から担任が西村先生に変わり私が副担任になりますのでよろしくお願いします。」

Fモブ「何故担任が鉄人になるんだー!!?」

その2「嫌だー!!?」

西村「貴様らうるさいぞ！静かにせんか！それと今さけんどヤツらに關しては放課後補習があるからな覚悟しておくように。」

あーあ。どんまい。まあ、助ける気なんてないしうるさかったからざまあみろって感じなんだけどね？それにしてもなんでFクラスはこんななんだろう。すごく不思議だな。

ー昼休みー

屋上

雄二「さて、今日の昼飯は、カツ丼にラーメンにカレーだ！」

明久「よくそんなに食べれるよね。僕には無理だよ」

雄二「そうか？このぐらい余裕で食べるんだがな。そう言えば久しぶりの学校はどうだ？明久」

明久「ん？疲れはするけど楽しいよ？みんなのおかげだけだね。」

雄二「そうか。」

明久「うん。」

ほんとみんなには感謝しかないな。こんなことになっても信じてくれて、そして手伝ってくれて、学園長たちとの話の時にも着いてきてくれたり。感謝してもし足りないくらいだなほんと、僕にはもったいないくらいの良い親友たちだよ。こんなこと言ったら怒られそうだけどね？

明久「そういえばさ雄二。試召戦争はどうするの？」

雄二「そうだな。来週辺りにDクラスと最初に試召戦争やるか。」

明久「そっか。分かった。てか、姫路さんたち今日はまだ関わってきてないね。」

雄二「ああ。そこが不思議だな。不思議どころか不気味ですらある2ヶ月もお前と会ってないのに真っ先にお前に話しかけようとしなかったからな。」

そう、普段色々関わってくるのに今日に限って一切関わってこようとしない。

明久「あ、そうだ。言い忘れてたけど今日自分の体に解析をかけたら小聖杯が見つかったよ。」

雄二「は？何処から？」

明久「僕の心臓から」

そう。ランニングしてる時に魔術回路がどのくらいあるのか調べようと思って解析をかけたら魔術回路が四百本くらいと心臓から小聖杯が見つかったんだよね。びっくりして走るのやめて棒立ちになっちゃったよ。

雄二「それをさっさと見え！」

明久「ごめんごめん。言うの忘れてた。」

雄二「たく、今度から気おつけろよ。」

明久「わかった、あと学校来る時に考えてたんだけど、多分英霊の召喚もできるよ。明日召喚しようと思ってるんだけど、見る？」

雄二「ああ。気になるからな、見てみるか。」

明久「分かったじゃあ明日召喚するね。」

雄二「ああ。」

明久「取り敢えずそろそろ授業だから教室戻ろうか。」

雄二「そうだな。」

どんな英霊が召喚されるんだろうかな。1人は予想できるんだけどねアーチャーだと思うけど。ん？そっか。小聖杯があるって事は一体以上召喚できるんだ。誰にしよ  
うかな？まあ。それは運に任せよつと。

明久 set out

? s e t

? 「ねえ???あれどう思う?」

? 「そうですね???ちやん明久くんはかなり可愛くなってますが坂本くんたちが近くに  
いるからどうしようもないですよね。」

? 「そうですね。坂本たちと離れた時を狙いましょうか。」

? 「そうですね。家では多分離れるでしょうからそこを狙いましょう」

? 「はい」

## 第7問

明久 set

取り敢えず雄二たちもいるし始めようかな？

明久「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総の善と成る者、

我は常世総ての悪を敷しく者。



汝 三大の言霊を纏まとう七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!」

村正「サーヴァントセイバー千子村正」

エミヤ「サーヴァントアーチャーエミヤ」

アストルフオ「サーヴァントライダーアストルフオ」

(以降アス)

「呼びかけに応じ参上した君がマスターか?」

明久「うん。僕がマスターだよ。」

さて、なんでこの3人なんだろう色々理由がありそうだけどその辺は後で聞けばいいよね。(全員作者の趣味です)なんか聞こえた気がする。気の所為だよね。

エミヤ「ところでマスター聖杯からの情報が入ってきていないのだがそれ以前に聖杯自体がないように感じる。どうやって我々の魔力を補っているのかね?」

明久「ん?僕の魔力だよ?」

エミヤ「なんだと!?!この人数の魔力供給をひとりで行っているのか!?!普通はありえないぞ!?!」

明久「でも事実だしな」

理由があるんだろうけどよく分からないんだよな。あ、確か小聖杯が埋め込まれて

たんだよね。それが理由かな？

明久「一応思い当たるとすれば体の中に小聖杯があることかな？」

エミヤ「何!? 小聖杯だと？」

明久「うん。」

それ以外は思い当たらないしな。それくらいだよ。取り敢えず準備しないと学校に間に合わなくなるから準備しよう。

あれ? てかなんで3人も出てきたんだろう。まあいつか。ささてと。学校行こつと。

明久「そう言えば3人はこれからどうするの? 僕たちはこれから学校に行くけど。」

エミヤ「そうだな。霊体化してマスターについて行くでしょう。」

明久「そっか。わかった。」

あれ? この回雄二たちがまだ喋ってないな。? この回って何?

明久「雄二たちどうしたの? さっきからずっと黙ってるけど。」

雄二「知ってはいたけどこんなことが実際に怒っていたらこうなるだろ。俺らからす

れば未知の存在だぞ?」

明久「そうだったね。まあそれはさておきとりあえず学校行かないと遅れるよ?」

雄二「そうだな。サーヴァントたちは着いてくるのか?」

明久「うん。霊体化して着いてくるみたい。」

本当にサーヴァントって不思議だよ。英霊だからこそなんだろうけど、さてと学校に行こうと思うけど、たしか今日から試召戦争が始まるんだっけ？

明久「そういえば雄二。たしか今日から試召戦争をやるんだっけ？」

雄二「ああ。今日から始めようと思ってる。」

明久「Fクラスの人達がやってくれると思う？」

雄二「その辺は転がせることがいくらでもできるからな。あいつらは単純なバカだからな。」

明久「うん。否定はしない。」

実際事実だしね。僕もこうなる前まではそれと変わらなかつたんだよね。はあ。

明久「そういえば。僕の武器って投影魔術を使わないと木刀だけど使った方がいい？」

それともその先の戦いまで取っとく？」

雄二「そうだな。今日のDクラス戦の後はBクラスと戦う予定だから。点数を少し低めにして投影魔術を使わない方向で頼む。」

明久「わかった。そういえばBクラスの代表って誰なの？」

雄二「俺は分らんが、ムツツリー二分かるか？」

康太「……俺の調べによるとBクラスの代表は根本恭二だ。」

雄二「あの根本か？」

康太「……………ああ。」

ここで少し話しておこうかな？根本くんは卑怯で有名な生徒で、喧嘩に刃物は当たり前で、テストではカンニングをしているって噂が流れるほどの人なんだ。

あれ？僕は誰に説明してるんだろう。

(それは画面の前の人だよ？)

作者。メタい発言しないで。

(君も大概だからね？)

作者がそう書いてるからでしょ？

(それがメタいつて言ってるんだよ？とりあえず僕と話すのは終わりにして現実に戻ろっか。)

そうだね。

明久「Bクラスの次はAクラスだよな？でもどんな風にするの？普通に戦っても勝てないんじゃない？」

(ちなみに。既に家から出発して学校に向かっている途中。)

雄二「それはつと、その前に学校が見えてきたから、その話は後にしようぜ」

明久「そうだね。さてと。はあ。」

雄二「どうしたんだ？」

明久「いや、あの二人がいると思うとね。」

雄二「いざとなりやくサーヴァント達に守ってもらえばいいだろ。」

明久「そうだね。」

なんで毎回あの二人は僕に絡んでくるんだろう。他の人と話してればいいのに。面倒臭いな。

(この作品の明久はかなり口調が荒れることがあります。それと、鈍感なのは変わらなかつたですねww)

なんかバカにされた気がする。まあいいか。

さてと、楽しみだな、試召戦争どんな結末になるのかな？

—————

学校

雄二「さてお前ら今日は俺から話がある。」

F1「なんだよ代表？」

雄二「お前らはAクラスの設備を見てきたか？個人冷蔵庫に個人パソコン個人クローラーにリクライニングシート。それに比べてこのクラスは腐った畳すぐ折れるちゃぶ台すきま風の入る壁綿のほとんど無い座布団。不満は無いか？」

「「大ありじゃあ———!!!」」

(作者の都合により少々省略します。)

雄二「そうだろう。俺もこのクラスの状態には不満を感じてる。そこでだ。お前から試験召喚戦争をしないか？」

F1「いや無理だろ」

F2「それは無謀だつて。」

(度々すいません少々省略させていただきます。)

とまあ。こんな感じで召喚戦争をやることになんただけで、島田さんが宣戦布告に行ったらポロポロになって帰ってきた。なんでだろう。

明久「ねえ雄二。なんで島田さんはポロポロになって帰ってきたの？」

雄二「まあ。下位のクラスからの宣戦布告があつた場合上位のクラスは大抵宣戦布告に来たやつをボコすからな。」

明久「島田さん拒否しなかったの？」

雄二「普通女子に男子が攻撃する訳ないだろうと言つて行かせた。まあその後には大半のクラスから嫌われているお前は別だがなどあいつが行つてから伝えたけどな。」

明久「雄二つてさかなり鬼畜だよな。」

雄二「そうか？友達を傷つけるようなやつにかける情け容赦無し。だと思ふんだが。」

明久「それもそつか。」

さてと屋上で作戦会議しながらお弁当食べよつと。

屋上

明久「さてとお昼お昼。」

島田「アキそのお弁当誰に作ってもらったの？」

明久「これ？僕と雄二で一緒に作ったけど？」

島田「嘘ね。」

姫路「嘘ですね。」

明久「ほんとだよ!？」

姫路「嘘です!吉井くんは料理ができません!」

明久「できるからね!?!これでも何年も一人暮らししてるんだから!」

島田「本当のことを言いなさい!!」

はあ。なんでこの人たちは決めつけるんだろう。事実なんだけど人のこと信じてないのかな。

雄二「本当のことだぞ。中学の時から友達だが、実際中学から一人暮らししてて自分で飯作ってたからな」

雄二ありがとう。普通に事実だからね。

秀吉「ところでなんでDクラスからナノじゃ？ 順当に行くならばEクラスからが普通じゃと思うのじゃが。」

雄二「まあそれはEクラスが戦うまでもない相手だからだ。」

(すいませんキリが悪くなつてしまいましたがここまでで終わらせていただきます。)



## 第8問

明久 set

明久「戦うまでもないってどういうこと？僕たちよりクラスは上だよ？」

雄二「確かにクラスは向こうの方が上だが、こちらにはお前やムツツリー二など腕輪持ちが何人かいることで、かなりの戦力がある。だからこそEクラスと戦う必要はない。」

秀吉「それじゃあ、Dクラスは絶対でわ無いということかおう？」

雄二「ああ。姫路に点数がないことに加えて補充テストを明久が受けてないことからそこに関しては絶対とは言えない。明久に関しては観察処分者としての操作技術があるが、それだけで補えるほど敵は弱くない。」

確かにDクラスとFクラスの点数では約2倍の差がある。そうなるのかなり前線の維持が厳しくなってしまう。

明久「となると僕らで全然の維持をしている間に姫路さんには補充テストを受けてもらうってこと？」

雄二「そういうことだ明久。そして補充が終わり次第Dクラスに攻め込む。」

「なるほどね。確かにそうすれば勝てる可能性はかなり上がるけど、それでどうになるかはわからない。前線が壊滅してしまえば代表である雄二が危ない。」

明久「でもそれだとも前線が壊滅してしまうと代表である雄二が危険にさらされることになるよ?」

雄二「そうだな。ならば明久お前は護衛として残れ。全然の作戦指揮は秀吉に、中堅部隊の指揮には島田を任命する。ムツツリーニには敵のところへ潜入情報を持ってきてもらいたい。」

なるほど、これなら安心だね

雄二「何か問題のあるやつはいるか?」

明久「大丈夫だよ。」

秀吉「問題ないのじゃ」

康太「……問題ない」

雄二「よし。ならこれで会議を終わろうぜこのあと飯を食って開戦だ。」  
その後少し雑談しながらご飯を食べた。

――開戦後――

Dモブ「相手はFクラスだ。点数はこちらの方が高い。必ず勝つぞ!」

Fモブ「点数は相手の方が高い。必ずツーマンセルを意識して戦え!」

今どんな感じだろうな？外の声は聞こえてくるけど状況までは分からないだよね。

Fモブ「伝令！前線部隊が追い込まれてる模様。このままでは前線部隊が壊滅します！」

雄二「中衛部隊を出勤させろ。後、島田に伝令だ。逃げたらクロスと伝えろ」

Fモブ「分かりました！」

明久「何とかかなりそうだね。とりあえずは姫路さんの点数を補充しないとだけどその時間はおそらく稼ぐことが出来る。でも」

雄二「ああ。中衛部隊をが、どのくらい持つかが分からん。」

そう。そこが一番心配なんだよね。中衛部隊をが壊滅してしまうと一気にここまで攻め込まれる。そうなると負ける可能性がとても高くなってしまう。

Fモブ「代表！中衛部隊が壊滅しました。」

明久「な！早すぎる。」

雄二「ああ。もう少し持つと思ったんだが、このままだとまずいな。

明久行けるか？」

明久「もちろん。いつでも行けるよ？」

雄二「わかった。なら明久はこのまま攻め込んできた敵の迎撃をしろ」

明久「わかった」

こんなにも早く壊滅すると思わなかった。もう少し持つと思ったんだけど、このまま時間が稼げなければ負ける可能性が出てきてしまう。そうなると目標であったAクラスに勝つことが出来なくなってしまう。

平賀「さてFクラスの代表。どうやらここまでみたいだね。残っているのは君とその観察処分者飲みみたいだからね。」

雄二「フン。観察処分だからと言って舐めてかかると負けるのはてめえらの方だけ？」

明久「試験召喚獣召喚サモン」

僕の召喚獣の装備は真剣に改造学ランそしてうーん、例えるならソード・オート・オンラインのユウキの防具？服？まあそんな感じかな？

腕輪を使うと新撰組の隊服になるみたいだけど、させと、やるとしようかな？

明久「誰からかかってくる？」

Dモブ「テメエごとき俺一人で十分だ。」

明久「そっか。投影、開始」

Dモブ「な!？」

Dモブ2「武器が変わった!？」

明久「これが僕の召喚獣の特殊な能力。感殺処分者としての学園長の実験の手伝いの

報酬としてつけてもらったもの投影魔術。過去の英雄の武器それを投影すること。」

僕が今投影したのは干将・莫耶これは点数を消費しなくても投影できるからね。

明久「他の武器だと点数を消費するものもあるけどこれのみなら消費することは無いからね。行くよ?」

僕は召喚獣を相手の召喚獣に接近させすれ違いざまに首を切った。相手の召喚獣は急所を切られたことで一撃で戦死した。

Dモブ「なんで俺の召喚獣が一撃で!」

明久「召喚獣にも急所は存在するからねそこ目掛けて切つてしまえば一撃で倒すことが出来る。」

明久「まあ。この戦争で決着をつけるのは僕じゃないからね。あとは頼んだよ? 姫路さん。」

Dクラスの人たちは何言つてんだこいつつて顔をしてるけど、後ろ見た方がいいと思うよ?」

姫路「あ、あの」

平賀「うん? どうしたんだい? 姫路さん。Aクラスはここを通らないはずだけど。」

姫路「あの、Fクラスの姫路です。Dクラスからの代表に現代文で勝負をしかけます。

サモン」

平賀「あ、ああよろしく、あれ？」

Dクラス平賀 現代文116点

Fクラス姫路

現代文326点

姫路「ごめんなさい。」

先生「Dクラス代表戦死によりこの戦争Fクラスの勝利です。」

うん。何とかなかったね。多分この人数なら何とかなかったかもしれないけどね。不確定要素が多すぎるから。

先生「このあと戦後対談に入ります。代表のふたりは戦後対談を始めてください。」

平賀「ルールどうりDクラスの教室は空け渡そう。だが、クラスの移動は明日でもいいか？戦争でみんなも疲れてるから。」

雄二「その事なんだが、クラスの教室替えはしない。ただ、3ヶ月間俺らのクラスに攻め込まないことと少し頼みを聞いて欲しい。無茶なことは頼まないで約束しよう。」

まあ。Fクラスのメンツは多分それで満足して戦争で本気を出さなさそうだしね。

平賀「いいのかい？」

雄二「ああ。だが先程言った条件を飲んで貰うことになるが。」

平賀「それで教室が守れるなら構わないよ。」

Fモブ「どういことだよ代表！」

Fモブ2「折角今よりマシな設備が手に入るのに！」

明久「少し静かにしなよ。君たちのことだから今より上の設備を手に入れたらそれで満足して戦争に全力を出さなくなるでしょ？」

うん。否定しないってことはそうなんだろうね。

雄二「とりあえずそんな感じで頼む。お前から今日の戦争はご苦労だった。明日と明後日は補充テストを受けてもらって明後日Bクラスに宣戦布告をする。今日は十分に休んでくれ。」

## 第9問

明久 set

うん。かなり時間が飛んだ気がする。

雄二「さて、これからBクラスに宣戦布告をするつもりだが、宣戦布告には横溝に行ってもらいたいと思う。」

横溝「断る！酷い目にあうのが目に見えてるのに行く奴がいるか！」

雄二「ふむ。仕方がないな。なら、俺と殴り合いするのと宣戦布告するのならどちらがいい？」

横溝「行ってくる」

雄二「全く。最初から行けばいいと言うのに。」

そんな人は中々いないと思うけどな。まあ仕方がないよね。雄二のみんなの扱いの酷さは今に始まったことじゃないし。

雄二「明久。今なにか失礼なことを考えなかったか？」

明久「そんなことないよ？」

なんでこいつは人の考えていることがわかるのだろうか？



そういえば今更思い出したけどあそここの研究所のヤツらおつてこないな。なんでだろ？ん？ああ。たしか前にあの牢屋に入れた人は望んだ能力じゃなかったのかな？つて考えたことがあつた気がするけど、その情報をばらされたくないから望んでなくても追っ手が来ると思つてたんだけどね。

雄二「明久。この試召戦争お前は中盤あたりからの参戦になる。」

明久「なんで？Fクラスはほとんど頼りないから最初から出た方がいいと思うけど、それに僕が出ればFクラスは単純だから士気が上がると思うよ？」

雄二「そうなんだが、それだと、この後の作戦に支障が出る。」

明久「ん？ああ、Bクラスの代表が、根本だから？」

雄二「ああ。お前でも人を呼び捨てにすることつてあるんだな。」

明久「まあね。本人から頼まれたり、特に嫌いな人だったら呼び捨てだけど、根本は前者だよ？僕と同じ被験者で、僕より一ヶ月前にその実験を施されたね。この失敗作の証は僕が来た時に出来たらしくて根本以外の人に最初にそれを施したら暴走したらしくて時間が経つた人間には施されないんだ。」

それは。一緒に逃げた時に聞いた話。

明久「だから根本は卑怯なことほしくないよ？それよりも根倉の方かな？問題は。昔の根本と同じで昔は一緒に色々やらかしてたらしいから」

雄二「そうなのか、俺の情報には無かったぞ？」

明久「まあ大半が根本の方に押し付けてたらしいからね。根本が愚痴ってたよ？」

ん？LINE？根本からだ。なにに？今思ったんだが、苗字呼びだと根倉と同じ様な感じになってしまいうから名前前で呼んでくれて、凄くある意味いいタイミングだね。まあ。ある程度能力者たちは考えてることがわかるからね。了解つと

明久「だから恭二は大丈夫だよ？」

雄二「なぜ急に名前呼びになった？」

明久「恭二からLINEが来たから。」

雄二「なるほどな。」

実験の影響かかなり見た目は女性よりだけどね。

明久「実験の影響でかなり見た目は女性に近くなったから多分初めて見たら驚くよ？」

雄二「そんなに？」

明久「うん。部類で言ったら綺麗なたぐいなんだけど向こうは僕があとから来たからそれが理由でわかってたみたいだけど僕は一切分からなくてね。聞いた時に一瞬どこから人が追いかけてくるか分からず叫びかけたよ？」

雄二「なるほどな。」

恭二の能力はひとつは僕と同じく簡単に言えば羅刹の力2つ目は五大元素を操る力。3つ目はありとあらゆる属性を持った片手剣を作る力とりあえず知ってる限りだこのくらいかな？僕は人のこと言えないけど何気にチートだよな。

明久「でもだからこそ、恭二が厄介であることも否定できない。」

そう。能力が望んでいたものではないと言うだけで、僕らの能力は今のところ数人しかいないらしいけど強さだけで言えば成功した人たちより強い。

皮肉だよな。彼等より僕らの方が強いのに弱い方が成功作で強い方が失敗作だなんて。

横溝「い……行ってきたぞだ……代表。」

明久「あー。多分根倉達にやられたらしいね」

雄二「そうなのか？」

明久「言つたでしょ？恭二は今までとは違うって、こんなことはしないよ？大半が多分代表つてこともあるだろうけどたった数日でも恭二とか変わったことによりその変わったことを知って着いてきてくれる人は多いと思うよ？」

雄二「そうか。」

明久「うん。能力とか関係なく成功していた場合はその内容は酷かったけど、作戦の指揮のうまさを買われて成功した場合恭二が僕とほか数人の隊長になるはずだった



雄二「ああ。」

キンクリ

さてと、雄二の予想どうり誰かが来たね。

おそらく先程の協定を結びたいって話も根倉の罨だろうねここを点数の補充をできなくするための

Bモブ1「大丈夫なのか？こんなことして、先生に怒られたらシャレにならないぜ？」

Bモブ2「大丈夫だろ。どうせ根本に押し付けられようにもなるんだから。」

……今なんて言った？あいつら、恭二に押し付けられる？フザケルナ!! 1年前とは違うんだよ!

Bモブ3「そうだな」

Bモブ4「ああ。そうすれば俺らは怒られることは無いからな。」

Bモブ5「そうそう。みんな変わったとか言ってる奴らがいるけど節穴だよなあいつら」

節穴なのはお前らだよ！決めた。少しは手加減しようと思つてたけど、本気でやつていいよね？

ガラッ

Bモブ2「あん？誰かいるじゃねえか。まあいいか。そんな時のために先生を連れて

きたんだ、所詮Fクラスだ。叩き潰しちまえば問題はねえ。」

はは！ほんとにとことん人の地雷踏んでくれるよね。

明久「かかってきなよ、たたきつぶしてあげるから。」

先生は、数学の先生か。

Bモブ4「舐めんじゃねえよ。Fクラスごときが！」

Bモブ『サモン！』

あれ？てかなんであんなこと言ってる教師は何も言わな……あつ、そつか。僕の聴力はとてつもなく良くなってる。だから、めつちや小さい声での会話でも聞こえてしまうのか、多分小さい通信機のたぐいだね。それならつけてる人にしか聞こえないから。

明久「サモン！」

数学 吉井明久 428点

Bモブ平均158点

Bモブ1「なんでFクラスがそんな点数取れるんだよ！」

明久「色々あったから。それに、その時と今では違うんだよ？」

とりあえずさつさと終わらせよつか。不愉快だし

明久「終わらせる！切り裂く！鋼牙双月！」

数学 吉井明久 428点

Bモブ0点

Bモブ『な!?!』

この技鋼牙双月は僕が1から作り出した技だ。刀を一瞬で横薙ぎに切りその後、もう一本の刀で左右から切り裂くそれがこの技合計3連撃の技。

西村「戦死者は補修!」

Bモブ2「待ってくれ!あいつの負けだ!あいつはカンニングをしている!じゃなければあんな点数を観察処分者が取れるわけが無い!」

西村「カンニングはない!なぜなら俺がテストの監視官だからだ!」

あららまあ。同情はしないけどね。恭二に対して悪口を……僕の友の悪口を言ったんだそんなことする価値もない。

少し時間が飛びます。

雄二「戻ったぞ。明久、無事か?」

明久「うん。5人ほど来たけどね。速攻で倒してつてやったからね。」

いや、普段なら少しはどうかかなるんだけどね。友の悪口を聞いてしまったら感情の制御が疎かになってしまった。

## 第10問

恭二 set

恭二「ある程度能力者同士意思疎通が可能なんだから何考えてるかわかるってのにあいつもお人好しだよな。」

俺は小声でボソツと呟いた

理由は先程同じ研究所で人体実験をされた被害者でありある意味俺が変わるきっかけを作ってくれた明久からの感情と、思いが伝わってきたからだ。

恭二「わかってるよ。これが戦争である以上今回のみは敵同士だ全力で相手をするさ。」

Bモブ「代表。Fクラスに対して根倉が送った奴らは全滅した模様です。」

こいつは俺について来てくれる奴らのひとりだ。あいつのおかげで変わった後その結果がとてつもない方向になった。邪険にされてるより断然いいな。

恭二「わかった向こうには明久や、坂本など、かなり厄介なヤツらが多い。気おつけてくれ

ところで、根倉はどこに行ったんだ？」



Bモブ「Fクラス代表に対して協定を結びに行きました内容は5時を過ぎた時点で戦争その場で中斷明日え繰越しその間戦争に関する一切関わることを禁止にするとうものです。」

恭二「なるほど。おそらくCクラスにその件で交渉をもちかけるはずだ。友香に伝令を出してくれ。根倉がこの後協力をもう仕掛けに行くだろうが、とりあえず了承だけしてくれ、根倉がどれくらいやれるのかを見たいとな。そして、それが失敗に終わった場合根倉派完全に潰すことにするとな。」

この方が安全だろう。何より明久たちに迷惑をかけなくてすむ。その後明久と一体で戦うとするか。

恭二「その後明久と俺で一体で戦うこととする。負けてしまうかもしれないが、それでも着いてきてくれるか？」

Bモブ「もちろん。」

こうなったのもあいつのおかげだな。あそこから脱走できた時、俺は完全に他人を信じてなかった。だが、あいつは俺が1年の時行つたことなど水に流して……いや少し……かなり切れてはいたが、それでも水に流して俺を信用し、共に協力してくれた。それが無ければ俺はこんなふうにならなかつただろうな。

恭二「あいつには感謝しかできねえな。だからこそ、俺はあいつを裏切らない！」

—————

明久 set

明久「雄二取り敢えずおつかれ、どうなったの？」

雄二「ああ。とりあえず五時にてその場で一時休戦、その後次の日9時まで戦争に關わることを禁止するということらしい。」

なるほど、おそらく根倉はそこに罫を仕掛けてるんだらうけど、甘いよね。その程度で僕らを打ちとろうなんて。

まあいいか。それにあえて乗って恭二をバカにした罪を償わせるから。覚えておきなよ？

君は僕……私を怒らせただから。

雄二「とりあえず明久は戦線に参加してくれ」

明久「うん」

Fモブ「代表！島田が、」

ん？島田さんがどうしたんだらう？

Fモブ「島田が人質に取られた！」

は？なんで？

明久「雄二。島田さんてさ、前線の部隊長を任せてたはずだよね？」

雄二「ああ。明久、すまんが少しわがままに付き合ってくれ。」

だいたい何するかわかったけど、いちいち確認取らなくても、そのくらいするのに。

明久「いいよ？どうせ、島田さんを代表自ら戦死させに行くつもりでしょ？」

雄二「ああ、やつは俺自ら戦死させる。部隊を離れたことに關しても、それによつて他の奴らを危険に巻き込んだことも部隊長としてやつては行けないことをやつはやらしたからな。」

明久「うん。だと思った。僕はそこまでの代表の護衛と教室までの護衛でしょ？」

雄二「その通りだ。」

だと思った。まあ。前までならやらなかったんだらうけどね。捕まった前と後とじゃ雄二にしろ秀吉にしろムツツリー二にしろかなり変わったよね。

——前線——

島田「吉井！ウチを助けなさい！」

Fモブ「代表どうするんだ？それより！代表がここに来て大丈夫なのか!？」

雄二「心配するな。そのために護衛として明久を連れてきた。」

うん。まあ、この期に及んでまだ助けろと命令してるんだからすごいよねある意味

雄二「島田。お前は前線を離れて部隊を危険に晒した。よつてお前を助けることは無

い！これは代表である俺の決定だ！てことでBクロスのヤツら、そいつはとつくに人質としての役割を果たさん。とつと倒されることをおすすめるぜ？」

Bモブ1「まで！こいつが何で捕まったのか知りたくないのか!!」

雄二「興味もない」

すぐくドライだね。真面目に見切りをつけた人には普段からそうだけど。

島田「ふざけないでよなんでそんな事で戦死させられないといけないのよ。吉井！ウチを助けなさいよ！」

明久「雄二が言つてたでしょ？舞台を危険に晒したことそれによつて負けに繋がるかもしれないかったこと。僕はかなり怒ってるからね？今まで我慢してたけど、そろそろ限界がくるよ？」

これ以上聞く気もないし。

雄二「サモン！」

化学 坂本雄二

259点

島田美波42点

Bモブ95

点Bモブ114点

結果は書くまでもなく、雄二の勝ちだよ。当然ながら。

西村「戦死者は補修！」

Bモブ『くそくそ!!!』

島田「覚えてなさいよ！坂本！吉井！」

僕らはそんなこと言われる筋合いはないんだよね。結局自業自得なんだから。

キンクリ

さてと、5時になったからここまでだね

雄二「Cクラスが宣戦布告の準備をしてるだど？」

康太（。）。（。）。（。）。ココ「……こちらで調べて確認した。」

雄二「漁夫の利を狙ってやがるのか。いやらしいやつらめ。よし、今から俺とムツリーニと明久の3人で協定を持ちかけに行くぞ。」

完全に罠だけどここは雄二にだけは伝えとかないとね。

明久「雄二。ここだけの話なんだけど、これ完全に根倉のわなだと思うんだよね。黙っててごめん。でも代表である雄二には伝えないとだから今伝えるね。」

雄二「どういふことだ？」

明久「これは完全に召喚戦争に関わることになる。そうすれば向こうは協定違反をしたというのを盾にこちらに勝負をしかけてくると思う。」

雄二「なるほどな。」

明久「だから逆にその罠を使わせてもらうんだ。」

雄二「分かった。それで行くぞ。」

明久「ありがと。」

流石悪友話が早いね。

——Cクラス教室前——

雄二「失礼する。このクラスの代表はいるか？」

やっぱりね。カーテンの裏だね。

友香「私だけFクラス代表がなんの用かしら？」

明久「小山さん。あそこに誰がいるの？」

友香「ダメダメじゃない。今日時に言われたから様子を見たけど、ダメみたいね。」

明久「恭二が？」

友香「あなたを裏切るような事じゃないから安心して。」

明久「そこは分かってるよ。」

恭二がそんなことをしないのくらいね。さっきそれが決意として僕に伝わってきたから。

明久「とりあえず、出てきなよ根倉！」

根倉「俺を呼び捨てにしてんじやねえよ観察処分者如きが！」

明久「敬う理由も価値も何も無いのにそんなことするわけないでしょ？それにね？僕は……いや、私は少なからず今回の件で切れてるから」

根倉「お前に切られる筋合いはないんだよ！」

明久「私の友を恭二を侮辱したことだよ。恭二は私にとつての友達違うな。親友だからさ。自分のことを人に押し付けるようなやつに親友を侮辱されたくないって訳」

根倉「ははは！あれが親友だと？笑わせるね。」

もういいや

向こうにも先生がいるだろうけど、その前に内緒で西村先生をこつちだつて呼ばせてもらった。

明久「西村先生。日本史のフィールド展開お願いします。」

西村「承認する」

補習担当だけど一応一時的に補習の時間が終わつたからきてもらったんだよね。西村先生は全教科のフィールドの展開が可能だから

根倉「な!？」

明久「いることを知ってるのに対策しないバカがいると思う？私を怒らせたことを後悔しろ！サモン！」

根倉「ははは。所詮は観察処分者だ。教科を指定されても勝てるに決まつてる。サモン！」

馬鹿だね。なんで君の部下たちが補習室送りになつたか聞いてないんだ。

日本史

吉井明久

658点

根倉

189点

根倉「な!?!カンニングだ!!バカの称号である観察処分者にそんな点数取れるわけない!」

西村「カンニングはない。なぜなら俺が試験の監督だったからだ。」

明久「それに観察処分者は別にバカの称号じゃないよ?ある意味似てるけど似ていない。馬鹿だからではなく問題児だからつけられるんであってね。」

そう。観察処分者は馬鹿だからではなく問題を起こしたから付けられることだ観察処分者≡馬鹿ってイメージが強いけどね?

明久「それと、君の召喚獣だけどさ。物理干渉は無いけど今フィードバックはあるからね?」

根倉「なんだと!?!」

明久「さつきから驚いてばかりだね。君は問題を起こしすぎた。それによって取り敢えずこの召喚戦争が終わったら僕は観察処分者から外されて君が観察処分者になることが決定したんだよ。」

根倉「そんな!?!」

明久「それが君の仕出かしたことだよ。投影、開始」

日本史

吉井明久

598点



僕が今投影したのはゲイ・ボルグケルト神話にて有名なクーフリーンの槍だ。投げれば必ず心臓を貫く。

明久「いくよ？」

根倉「ま・待て！」

明久「刺し穿てゲイ・ボルグ!!」

根倉「ぎやあああ！」

日本史 吉井明久

598点

根倉 d e a d

恭二「お、やっぱり終わってたか。」

明久「ヤッホー恭二」

恭二「おう。明久悪いんだが、今ここで俺と一体一で戦ってくれないか？」

明久「え？それって！」

恭二「ああ、俺が負ければBクラスの負けだ。友香ありがとな我儘に付き合ってくれて。」

友香「構わないわよ？いつもの事だし。ただ、次のデートは貴方の奢りね？恭二。」

恭二「わかったよ。」

全く。いい雰囲気だね。こっちはいきなりでビックリしてるってのに。

明久「いいの？と言うか大丈夫なの？」

恭二「ああ。クラスのヤツらにはもう話してきた。俺がお前と戦いたかったんだ。」  
そっか。そういうことならこっちも乗らない訳には行かないじゃん。

明久「わかったよ。戦おっか。教科は？」

恭二「世界史だな。」

明久「いいの？僕の得意科目だよ？」

帰ってくる言葉はわかってるんだけどね。

恭二「ああ、親友として全力のお前と戦ってみたい。」

予想どおり……ってちよつと待って！

明久「あれ聞いてたの!？」

恭二「ああ、嬉しかったぜ？」

明久「ごめん少し待って。」

もう嫌だ。いちばん恥ずかしいところを聞かれるなんて。

こうなったらもうヤケクソだ！

明久「西村先生世界史のフィールドお願いします！」

恭二「からかい過ぎたか？」

友香「おそらくそうだと思うわよ？」

西村「承認する」

明久・恭二『サモン!』

世界史

吉井明久

649点

根本恭二

368点

恭二「やっぱり勉強面では分が悪いか。」

明久「恭二の得意分野は作戦指揮でしょ?」

恭二「そうだな。」

普通にそれだけの点数行くだけですごいんだけどね。

明久・恭二『いざ尋常に、勝負!』

1ー1ー1 一時的に雄二 setter

そこからの戦いは圧巻の一言だった。

明久が刀を振ればそれを根本が弾きカウンターを与える。

明久はそれを紙一重で交して刀と鞘による擬似的な二刀流で対応する。暫くそうしていて、ずっと見ていたいとさえ思ってしまった。

雄二「すげえな。」

だが、何事にも終わりが来る。

世界史

吉井明久

198点

根本恭二

145点

明久「すごいね。操作技術には自信があつたんだけど、ここまで減らされちゃうなん

てね。」

恭二「かなりの期間一緒に訓練したりした影響だな。ある程度どんな戦い方をするかわかる。」

明久「でも、時間がかなり迫ってるから、大技で決めない？」

恭二「そうだな。」

2人とも大技で決めるようだ。

明久・恭二『行くぞ！（行くよ！）』

2人の大技がぶつかり合い暫くどうなったのかが分からなかった。

明久「今回の勝負」

恭二「ああ、今回の勝負はお前の勝ちだ。」

世界史

吉井明久

38点

根本恭二

Lost

明久「かなり紙一重だったけどね。」

——明久set——

かなりの接戦だったけど何とか勝つことが出来た。

西村「今回の試験召喚戦争はBクラス代表戦死により勝者Fクラス。」

恭二「坂本戦後対談なんだが、明日でもいいか？」

雄二「いや。必要ない。教室の交換はしないし、3ヶ月うちに攻め込んでくれなければそれでいい。ただ一つだけあるとすればだ。Aクラスに宣戦布告の準備があると伝えてくれ。そいつが女装をしてな。」

明久「雄二……そんな趣味があつたの？」

雄二「ねえよ!!見せしめだ見せしめ!そいつには今回散々ために合わせられたからな少々仕返ししても文句はないだろ?」

絶対少々じゃないんだよね、雄二だし。

恭二「わかった。Bクラス総員で必ず実行する。それよりもその後には撮影会をして全国に晒して社会的に死なせるのはどうだ?」

あれ?恭二ってこんな性格だっけ?

友香「完全に今回のあなたに対しての態度が原因よ?吉井くん。」

明久「な、なるほど?あ、それと、明久でいいよ?その方が親しみやすいし」

友香「そうね。ならよろしくね?明久くん」

明久「うん。」

とりあえずあそこでゲスい顔して話してるふたりはほつとくとしよつか。

## 第11問

明久 set

さてさて、あそこでゲスの極みみたいな会話をしてる代表たちはどうしようかな？

明久「友香さんあれ、どうすればいいと思う？」

友香「納得いくまで話させればいいと思うわよ？」

明久「そっか。そういえばさ友香さんこの後恭二も誘おうと思ってるんだけど2人も泊まりに来ない？僕の家」

友香「良いの？」

明久「もちろん」

恭二と話したいことも有るしね。僕が今日疑問に思ってしまったことそれを共有しておきたい。その方がいいと思っただからね。

明久「友香さん。恭二のことこれからもよろしくね？恭二ってかなり無茶するから」

恭二「それはお前にだけは言われたくないことだな明久。」

明久「いつの間に!？」

僕は猫としての特性があるから足音とか気づくから近ずいてきてたらわかるはずな

のに!?

恭二「あんだだけ会話に集中してればそうなるだろうな。それに、猫のつてのは耳より目の方がいいんじゃないのか?」

ハハハやらかした

明久「そうだね。そういえばどんな感じで纏まったの?」

恭二「ん? ああ、とりあえず女装させてAクラスに宣戦布告の準備があると言われた後に撮影会をして土屋に頼んでネットにアップそれと学校中にばら撒くことになった」  
うん。2人つてさ何気に息合ってるのとき卑怯ではなくなつたけど、ゲスイよね。

恭二「ゲスイは失礼じゃないか?」

明久「事実でしょ? そう言えばさつき友香さんには話したけど、今日泊まりに来ない? 服など持つてくればそのまま明日学校行けるしね。」

恭二「構わないぞ?」

うん。良かった聞きたいこと、話し合いたいことが多すぎてね。

あ、明日は土曜日だった。

明久「ごめん明日土曜日だった。普通に着替えて2日分の服持つてきて」

恭二「そうだなたまにはそんな感じで息抜きしてみるのもいいな。」

明久「雄二ー聞こえてた?」

雄二「ああ。わかった。あいつらにも伝えておく」

流石雄二、話が早いと楽だね。

取り敢えず今日のうちに疑問に感じたことを話した方がいいよね。

明久「恭二。家ついたらさ話したいことがある。」

恭二「どうした？急に真剣そうな声になって。」

明久「あそこでのことでちよつと疑問に思ったことがあるから、恭二は友香さんに話してるんでしょ？僕は雄二達に話してある。だからみんなにも聞いて欲しいことなんだ。」

恭二「わかった。じゃあまた後でな。服持ってお前ん家に行く。」

伝わったみたいだね。恭二も恭二で話が早くて助かるよね〜！でも今回はかなりやばいかもだからね、どうにかできるならしてしまいたい。

恭二「そう言えば来週少し紹介したいヤツがいるんだが、会ってくれないか？」

明久「ん？恭二がそんなこと言うなんて珍しいね。いいよ？どんな人なの？」

恭二「ああ、今Bクラスで代表の俺とあと3人幹部と言えいいのか？まあそんな感じのやつらがいるんだが、戦争が終わって落ち着いたら会ってくれ。」

明久「分かった」

どんな人なんだろうね、幹部か。まあ、会ってからののお楽しみかな？



明久「さてと帰ろつか。」

あ、今更だけど家族にこの件どう話せばいいんだろう

——帰宅中——

明久「恭二はさ親にこのこと話したの？恭二にとつては4ヶ月のあの期間のこと」

恭二「ああ。帰って直ぐに親がいたからな。そこで話した今はその話した幹部の1人の教会で過ごしている。」

明久「そつか。僕はまだなんだ。親が現在海外にいるから話そうにも話せないんだよね。」

なるべく早く話した方がいいこともわかってる。早く話せばそれだけ心配させるかもしれないけど、安心してもらえらるだろうから。

でも、それでも今の状態を僕にはどう説明すればいいかその時になったら分からなくなってしまうそうだからね。

それに僕自身まだ少し混乱してるのもあるけど、何より……まだ終わってないから。

恭二「まあ、分からなくもないがな、なるべく早く話せよ？」

明久「わかってるよ。」

ありがと。

——明久宅——

さてと着いたしみんなも集まってるから話そうかな？

明久「恭二、僕が疑問に思ったことがあるって言ったよね？」

恭二「ああ。」

明久「僕が疑問に思ったことは、僕らと成功作と言われた人たちの違いについて。」

恭二「どういふことだ？」

明久「疑問に思わなかった？なぜ彼らより強い僕たちが失敗作と呼ばれたのか、そこに疑問に思ったから今日さ教室にいる時その事について少し考えてたんだよね。」

そう。それで答えが多分出た。

明久「もしたらさ一つだけ思いついたんだよね。彼らと僕らの違いにね。」

恭二「何だったんだ？」

明久「持っている能力、その属性。」

恭二「属性？」

そう、属性だ。そこが彼らと僕らの……成功作と失敗作の違いだと思った。

明久「うん。彼等もしくは彼女は彼女らにあつて僕らになかったもの、それは光という属性。彼らは全員必ず光の属性を持っていた。」

恭二「確かに、模擬戦をした時あいつらは必ず光を使ってきた。」

明久「でもさくそう考えると研究所の人たちもバカだよ。僕の投影魔術は衛宮士郎

の物と完全に同じで、その全ての記憶が僕の中にある。だから聖剣だって投影できるの  
にね。」

でも、待てよ？なら、彼等は何と戦う目的で、僕らをこんなふうにした？

明久「ごめん。ひとつ疑問が増えちゃった。」

恭二「多分わかる。何のためにいや、何と戦うために光の属性を集めてるか、だろ？」

明久「うん。ただ戦力が欲しいのであれば僕らの方がいいはず。だって彼らに圧勝した実力だつてあるんだから。ならなぜ、何と戦うつもりなのか、頑なに光という属性に拘るのか。それがまた疑問だよな。」

ひとつ解決したらまた問題が出てきちゃった。面倒だな

でも、そのおかげで、今後どうするかを考える余裕ができたから良いかな？

明久「まあ僕の考えはこんな感じかな？」

雄二「それなんだが」

明久「雄二どうしたの？」

雄二「ああ、昨日とか聞いてた情報をもとにムッツリーニ調べてもらっていたんだ。

その研究所の現在の場所、そして何故こんな実験をしているか。」

そんな事頼んでたの!?

明久「危なくなかった？」

康太「……問題は無い。見つかるようなヘマはしない。」

雄二「話を続けるぞ？それで調べたところ出てきたことがあった。とつくに出入口は移動してしまったようでそちらに関しての収穫はなかったが、なぜこんな実験をするのかは分かった。」

明久「どうしてだったの？」

ことと次第によつては多分僕は暴走してしまうと思う。嫌、ことと次第によらなくてもかな？こんなことされてきれいな人はいないと思うよ？

雄二「ああ、悪魔に対抗するためだという報告を受けた。だが、当然急にこんなこと言われても納得いくわけない。そこで最近の事件でとても興味深いものがあつた。不振な死に方をした事件が多数発生している。そこはジメジメしていてかなり嫌な雰囲気がある場所らしい。」

毎回なと雄二がつけ加えた。でも、すぐにそんなことを納得できるわけもない。でもそんな証拠を出されてしまえば信じざるおえないし、確かにそれが理由だからこそ、光という属性が必要だったんだらうね。

でも、だとしても!!こんな!!非人道的なことをやっていい理由にはならない!!!!

恭二「明久。考えてることもわかるし同意もするが、今わ抑えろ。」

明久「ごめん。かなり取り乱しちゃった。」

雄二「ん？どうして考えてることが完璧にわかるんだ？ある程度長く過ごしているから俺もこいつの考えてる事はわかるが完璧では無い。」

恭二「能力者同士、その中でも隊長とその部下たちはほぼ完全に考えをリンクする事が出来る。俺らの場合は俺が隊長で明久が副隊長になりあと八人ほど部下が来る予定だった。」

雄二「そういうことだったのか。」

——雄二 setter——

なるほどな。それによる意思疎通で会話をすることで漏れてしまいかねない情報を漏れないようにしているのか。

だが、そこまで徹底するとわな。

明久がキレル理由もわかる。こいつら異常に酷い目にあっている奴らも、未だにそこにいるからこそいてもおかしくない。

康太「……それと明久の言つてた謎の人物に接触した。そいつの話によると根本たちの部下8名はお前らについて行くために研究所を脱走することを決意お前らのところに次第に合流するそうだ。」

——明久 setter——

明久「良かった。合流してくれることも嬉しいけどそれ以上に無事でいてくれて良

かった。これで無事だった人がいるってことがわかったから。ありがとねムツツリー二。」

時間が経ってもいいから全員そろうといいな。

そうすれば僕らの部隊は全員がある程度は多分安全になるから、この後、明日お母さんたち連絡をしようかな？

それで全員が居ることができる場所を提供できないか交渉しよう。

うん。でも、

アス「アツキー、難しく考えない方がいいと思うよ？」

明久「え？」

アス「だって自分に起こったことをそのまま素直に話していくだけでしょ？信じて貰えなければそれに関しての証拠を見せればいいんだし。」

明久「ありがとう。……でもアスに言われるってなんか複雑。」

アス「アツキー酷くない!？」

明久「アハハハハハハハハ。でもありがとうホントに」

アス「どういたしまして♪」

さて、そうと決まれば明日に備えて寝ようかな？

なるべく早く合流して欲しいな。佳に純斗に空座に括帆に沙雨に里香に杏に舞奈。

そうなれば、今より楽しくなるかな？

——朝——

明久「ふああ」

母さんたちはアメリカにいて仕事だからそろそろ終わって家着く頃かな？

プップルルルルルルルルルルルルルルルルガチャツ

母「明久!？」

明久「うん。ごめん心配かけて、今何があつたか説明するんだけど、自分でも少しだけまだ混乱してて、時間がかかるかもしれないんだけど聞いてくれる？」

母「子供の話を聞かない親がいるわけないでしょ？」

明久「ありがとう」

その後僕は少し言葉が途絶えたりしながらも最後まで説明をした。

母「そんなことがあつたのね。……頑張ったわね。」

明久「ありがとう。」

母「それで、確か部下の人達がこれから合流するかもしれないのね？分かつたわ。少し時間がかかるけど用意しておくわね？」

明久「ありがとう。だけどいいの？お金も当然かかるし急なことなのに」

母「貯金もあるし大丈夫よ」

明久「ならいいけど、ありがとね。」

母「そろそろきるわよ？」

明久「うん」

ガチャツ ツーツーツー

ーーー昼ーーー

さてと、学校もないし

明久「恭二ー少し鍛錬しない？」

恭二「いいけど、なんでだ？」

明久「少し感覚だけでも取り戻しておこうかなって思ってたね♪」

恭二「なるほどな」

あと、来週はいよいよAクラス戦だからね。

明久「ルールはつける？」

恭二「無しでいい」

明久「OK♪」

なら、精霊たちのみんなも手伝ってもらおうかな？

明久（皆、準備ってすぐ終わる？今から恭二と模擬戦するんだけど皆と久しぶりに一  
緒に戦いたいから）



ノーム（大丈夫だよ？）

ウインディーネ（私も大丈夫です。少しは話しかけて欲しいけどね。）

サラマンダー（わたしたちは明久について行くって決めたから、何時でも呼んで？）

シルフ（うん。わたしたちは明久と一心同体なんだからね！）

明久（ありがと）

恭二「準備できたぞ？」

明久「わかった。」

精霊のみんなは最初心を閉ざしてたけど今は明るくなってくれたからよかった。

なら最初はバランスのいいシルフにしようかな？刀だしそうすれば剣術もかなり使えるからね。

明久「雄二ー！合図して」

雄二「急だな！オイ。まあいいか。初め！」

明久「化現せよ風の精霊！シルフ！精霊武装・刀」

恭二「初っ端からか。なら俺も片手剣召喚属性付与炎」

2人「ハアアアアア！」

明久が刀で袈裟斬りを最初に放つと恭二は片手剣でそれを弾いて連続で攻撃を仕掛けた。

それを明久はバックステップの容量で避けると一気に接近して突きを放った。

「恭二が突きに対して同じく武器どうしに当てる形で突きを繰り出すと、突きが刀にあたる前に刀から風の刃が放たれる。」

「雄二「そこまで！取り敢えずこれからも少し用事があるんだ。それにこれ以上やったらこの辺りがボロボロになってしまうからな。」

明久「ごめん」

「……………キンクリ……………すいません作者の都合で飛ばします。……………」

月曜日……………」

明久「雄二ー今から宣戦布告に行くの？」

「雄二「ああ。だから秀吉と康太あと、明久は着いてきてくれ。」

「秀吉「わかったのじゃ」

「康太「……………わかった」

「明久「いいよ」

「……………Aクラス前……………」

ガラツ

「雄二「失礼する。Fクラス代表の坂本だが、このクラスの代表はいるか？」

「木下姉「今代表は席を外してるわ。」

雄二「そうか、まあいい。俺たちFクラスは宣戦布告をする。形式は1体1にして欲しい。」

木下姉「何を企んでるのかしら？姫路さんを出すつもり？そっちのクラスで代表に勝てるのは彼女くらいだから。」

まあ、そう思ってるだろうけど、甘いよね。Bクラス戦を見ていたなら僕らのことも知ってるはず……あ、そっか、ご時すぎたから残ってる人が少なかったのか。

雄二「いや、俺が出る。」

木下姉「信用出来ないわね。これは戦争だもの。」

明久「雄二なら5対5は？」

雄二「そうだななら5対5にして欲しい科目選択権はこちらが貰いたい。」

木下姉「うーん。代表に確認しないとほんとも」

翔子「……構わない。雄二の条件でいい」

木下姉「せめて2回選択権をくれない？」

雄二「それは構わない」

まあ多分それでも勝てるからね。

翔子「……一つだけ条件がある。」

雄二「なんだ？」

翔子「……負けた方はなんでも一つだけ言うことを聞く」

雄二「わかった。なら昼飯の後開戦で頼む。」

決まったね。

——午後——

高橋「ではこれよりAクラス対Fクラスの試召戦争を始めます。各クラス1人目の代表を出してください。」

木下姉「Aクラスからはあたしが行くわ。」

雄二「なら秀吉頼めるか？科目選択権は使っていない」

秀吉「わかったのじゃ」

## 第12問

明久set

さてと、読者のみんなには急に?になると思うけど、今から1回戦が始まるところだね。読者?なんの事だろうか?まあ、いつか!

高橋「それでは科目の選択をお願いします。」

秀吉「それでは、古典でお願いしますのじゃ」

高橋「古典フィールド承認しました、それでは1回戦目初め」

『サモン(なのじゃ)！』

古典

木下秀吉

379点

木下優子

395点

Aモブ『バカな!!!!』

まあ古典は秀吉の得意科目のひとつだからね当然でしょ?

僕らをFクラスだからと舐めてたら逆に負けるよ?まあ。口に出してないから分かるわけないけどね。

明久set out

秀吉 set

さて、点数はほぼ互角なのじゃが、僅かに差が出てしもうたからのう。慎重にならねばやられるのはこつちじゃな。

優子「様子見かしら？」

秀吉「点数は僅かに姉上の方が高いからのう、油断をしたらやられかねん。」

優子「それはそうだけど、いつまでたつても様子見では勝つことも出来ないわよ？」

それは分かかっておるが、点数は姉上の方が高い武器に關してもわしは薙刀、姉上はランスと盾守りと攻めどちらも出来るからの。慎重にならねば。

秀吉「ならば、これならどうかのう？」

攻防どちらもしつかりしているのであればヒットアンドアウェイを繰り返すしかあるまい。

それで通じるかどうかは試してみたらじゃ。試さなきや何も始まらんからのう。

明久にしる雄二にしるここまで連れてきてくれたのじゃ。ここでわしらも頑張らないでいつ頑張るといふのじゃ

優子「ヒットアンドアウェイね。なるほど確かにその方が効率はいいでしようけど、それじゃあ勝てないわよ。この戦法じゃ、武器の相性までは解消できないからね。」

たしかにその通りじゃのう。武器の相性にせよ、防具にせよAクラス故にどれをとつ

ても一級品じゃからのう。負ける可能性は高いのは最初からわかっている。それでも、なるべく相手を勢いづかせないことがワシの役目じゃ！

秀吉「確かにのう。最初はほぼ互角だった点数も既にワシは二桁をきつておる。じゃが、ワシの役目は勝つことではなく姉上達をなるべく勢いづかせない事じゃ！」

優子「っ！」

木下秀吉 0点 木下優子 25点

高橋「第一試合はAクラスの勝利です。」

秀吉「すまないのじゃ。」

雄二「元々相手を勢いづかせないことが目的だ。その目的はしっかりと果たしている。ならば文句は無い。」

明久「そうだね。それより次は僕だよね？」

雄二「ああ。勝ってきてくれ。」

明久「分かっている。必ず勝つてくるよ。」

明久は頼もしいのう。

秀吉 set out

明久 set

明久「Fクラスは第二回戦は僕が行きます。」

佐藤「Aクラスからは佐藤が行きます。科目は物理でお願いします。」

物理ね、確か435点だったかな？まあ、問題ないよね。

『サモン！』

物理

佐藤みほ 419点

吉井明久 435点

Aクラス『バカな!? 観察処分者の吉井が400点越えだど!?』

いや、観察処分者なのは否定しないけど別に観察処分者はバカの代名詞ではなく問題児の代名詞だからね。

それより、この点数なら腕輪である固有結界が使えるね。

明久「体は剣で出来ている

血潮は鉄で心は硝子

幾たびの戦場を越えて不敗

ただ一度の敗走はなく

ただ一度の勝利もなし

担い手はここに独り

剣の丘で鉄を打つ

ならば、我が生涯に意味は不要す



この体は、無限の剣で出来ていた

unlimited blade works」

佐藤「なんですか？これ」

明久「これが僕の腕輪の能力、固有結界。自身の心象風景を具現化させるものだよ。周りに刺さっている剣は僕の意思で自由に動かせる。こんなふうだね。」

腕輪を初めて発動したけど発動までにかかる時間はかなりかかるね。攻撃されても熾天覆う七つの円環でどうにかできるけど。

明久「さてと、これで終わりだよ。」

物理

佐藤みほ　　0点　　吉井明久335点

1回100点の消費ってかなりきついね。

高橋「2回戦はFクラスの勝利です」

あの腕輪固有結界は強いけど、点数を一気に持って行かれるのはきついな。もしもの場合以外は使わないのがいいかな？

明久「雄二く勝ったよ。」

## 第13問

雄二 set

あいつの戦い方はかなりすごいな。腕輪がある場合の戦い方はかなりめんどくさいな。戦うとなった場合だが、俺らがあいつと戦うことはあんまりないな。

作者（さて、ここからAクラス戦は作者の権限を使用し飛ばさせていただきます。）

雄二 set out

明久 set

ん？なんか時間が飛んだ気がする。気のせいかな？

作者（いやこの後の進め方が思いつきませんでした。恐らくこの話か、次回から島田&姫路がガッツリアンチ入ると思いますが、明久はかなり強いので問題ないですけどね。）

さて、結果だけど、勝ったね。

まあ、雄二のことだから教室の交換はしないんだろうけどね。なら多分一応、本当に一応Fクラスの人達も戦ったから、教室の設備を良くしてくれとか、学園長に交渉した

のかな？

翔子「…負けた。だからAクラスの教室は」

雄二「いや、教室の明け渡しはしなくていい。」

F1「どういことだよ坂本！」

は、予想どうりだけど、こうなるよね。黙らせるとしようかな？

明久「君たちは最後に戦った？DクラスBクラスはまだ、まだいいと思うけど、最後に闘しては君たちは戦ってないし、恐らく戦っててもFクラスの負けで終わってたら雄二に感謝するなら分かるけど、批判するのは違うと思うけど？」

F2「だけどアキちゃん！」

明久「アキちゃんって呼ぶのやめてくれない？納得できないなら君たちだけでAクラスと戦って見たら？ボロ負けするだけだと思っけど。」

F5「それは…」

明久「無理でしょ？勝てたのはほとんど雄二のおかげだよ？ここまで作戦を立てて勝ち進めてきたんだから。」

全くこのバカはこれで黙るなら最初から突つかかってこないで欲しいよね。

雄二「ババア見てるだろ？」

藤堂「全く態度の悪いジャリだね！まあ約束したからね。約束通りFクラスの教室を

Aクラスレベルまであげてあげるよ。ただ、少し時間がかかるから3日ほどは別の教室を留意するからそこで授業を受けな。」

雄二「分かった。まあそういうことだ。そうすれば問題ないだろう？」

にやはは、まあ最初から説明してればどうにかなったのかもしれないけどね。まあいっか。

雄二は僕たちの代表だからね。さてと腕輪の能力のひとつは分かったけどもうひとつつてこれ、なるほどね。

明久「雄二、この後多分同盟組む形にするんでしょ？」

雄二「ああ、そのつもりだ。」

明久「ならさ、ひとつお互いに手の内見せておかない？その方が安心だと思うけど。」  
雄二「それは構わないが、明久がやりたいのは手の内見せ合うという名の試したいことがあるんだろ？」

明久「まあね。僕の腕輪はさっきのやつその他に正確にはあれが本当の能力ではないって感じかな？もうひとつを使ってみたいからね。」

雄二「俺は構わないが、翔子はどうする？」

翔子「…私は構わない。」

多分これが予想どうりならかなりやばい気がするんだけどね。

高橋「では、エキシビジョンマッチという形でFクラスの吉井明久さんたいAクラスの霧島翔子さんの世界史で模擬試験召喚戦争を開始します。」

明久、翔子『サモン』

世界史

霧島翔子

452点

吉井明久

528点

明久「さてと腕輪使わせてもらうね。」

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せ

よ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、  
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

??? 「サーヴァントバーサーカー召喚に応じここに顕現した。」

A, F 『』

ありやりやみんな思考が追いついてないなーまあ仕方ないけどね。

明久「よろしくね。それより、君の真名を教えてください？」

??? 「私の真名はヴラド三世だ。またの名を……」

翔子「……串刺し公」

知ってるんだ。まあサーヴァントは反英雄も召喚されるしね。

明久「でもバーサーカーなのに理性があるんだね。」

ヴラド三世「バーサーカーでも理性のあるサーヴァントは何人かいる。私の他にもタ

マモキヤツトや、クーパーリンオルタ、モルガンなどね。」

明久「なるほどとりあえず今召喚戦争中なんだけど一緒に戦ってくれる？」

ヴラド三世「君は私のマスターだ当然協力しよう私の槍捌きをお見せしよう。」

## 第14問

明久 set

さてと、少し時間が飛んだ気がするんだけどまあいいか。

そろそろ彼らも来れるはずだからね。早く集まりたいんだけどな。

明久「そういえばさ雄二一応試召戦争は終わったけどこれからどうして行くの？」

雄二「そうだな。暫くは定期テストに向けて勉強だな。定期テストで装備の変更があるらしいしな。のための準備だな。そしてそれが終われば学園祭があるからその準備だろうな。」

明久「そういえばそうだね。そろそろ学園祭だったね。」

今年は何をやることになるんだろうな。去年は何をやったんだっけ。確か喫茶店だった気がするけど何喫茶だったっけ？まあいいか。

明久「雄二は今年何をやりたいの？」

雄二「特に考えてないな。」

明久「そっか。」

エミヤ「マスター外に何者がいるのだが、どうするかね？おそらく見たところ女性

2人マスターのクラスメイトだろう。先程からマスターに対して出てきなさいや、お仕置ですなどと言っているのだが、」

雄二「姫路たちだろうな。そんなこと言うのはあいつらしか思いつかねえ。」

エミヤ「追いついた方がいいかね？」

何でそんな事してくるようになってしまったんだろうね。昔はそんなことなく普通に話したり遊んだり馬鹿やったりしてただけなのに。

明久「お願いしてもいい？…僕が行ったらなにかしてきた時に加減ができないから。」

エミヤ「了解した、マスター」

雄二「相変わらずお前は優しいな。」

優しい、か。そんなことは無いと思ってただけだな。

雄二「お前は自分のことを優しいなんて思っていないんだろうが、優しくなかったらあの時はじまりの街で俺らと一緒に外に出るなんて考えにはならなかったんだよ。」

明久「友達だからだよ。そうじゃなかったら、あの場で連れていくって考えは無かったよ。」

雄二「お前が優しくくないなら、あのギルド、風刃の剣士はあそこまで大きくならなかったからな。」

明久「だけど、それは余裕が出来たからであって最初の頃じゃそんなことは…」



雄二「確かに最初はそうでも無かったな。だがそれは俺らを守ることに必死になつてたからだろ？俺らを守つてた上で他の奴らまで守るなんてことはあの時はできるはずがない。幾らお前がベーター版テストターあがりだとしてもレベルなどは最初からな上に死んだらそこで終わりだからな。最初からそんなことが出来るやつなんて居ないだろ？」

反論することも出来ないな。その通りすぎて笑えてきそうだよ。あの時の状態じゃあまだ安全に行けそうな道を知つていたとしても大人数になると守りきれなくなる可能性は否定できなかったからね。

雄二「お前は自分を下に見るのをやめろ。それが理由でお前は自信をもてなくて結局今の状態に陥る。もう少し自分を認めてやれ。」

明久「ありがとう。雄二おかげで少し自信がついたから。これからどうしていくか決めないでしょ？早く話そうか。」

雄二「そうだな。取り敢えず今日はこの後俺とお前で定期試験のための勉強だなまだ先ではあるが。」

明久「そういえば何で秀吉や、ムツツリー二はいないの？」

雄二「秀吉は姉の木下優子が、ムツツリー二に関しては工藤愛子が教えるらしい。それで行くところのなかつた俺はここに來たつて訳だ。」

明久「なるほどね。でも、霧島さんと一緒じゃなくて良かったの？」

雄二「今回は翔子の力を借りないでやりたいんだよ。」

なるほどね。変なところで意地っ張りだよね、雄二は。

雄二「そんな感じだから今日だけ泊めてくれないか？」

明久「良いよ？別に友達だし島田さんとかが来た時に僕だけじゃどうすればいいのか迷ってどうしようも無くなっちゃうから。」

雄二「助かる。」

明久「僕もその方がありがたいから。」

勉

強

中

雄二「そろそろ寝るか。」

明久「そうだね、寝ないと明日の学校にも響いてくるしね。」

雄二「それじゃあおやすみ。」

明久「うんおやすみ雄二。」

さて、明日からも頑張らないとな。みんなも合流するんだし副隊長として頑張っていないと。

夜

明久「少し目が覚めたな。公園まで散歩に行こう。」

公園

明久「ついたついた。よくここに来て歌ってたな——一人で。久しぶりに少し歌おうかな？」

明久「君の姿は僕に似ている

静かに泣いてるように胸に響く

何も知らない方が幸せというけど

僕はきつと満足しないはずだから

うつろに横たわる夜でも

僕が選んだ今を生きたい　それだけ

君の速さは僕に似ている

歯止めのきかなくなる空が怖くなって

僕はいつまで頑張ればいいの？

二人なら終わらせることができる

どうしても楽じゃない道を選んでる

砂にまみれた靴を払うこともなく

こんな風にしか生きれない

笑って頷いてくれるだろう 君なら

君に僕から約束しよう

いつか僕に向かって走って走ってくる時は

君の視線を外さずにいよう

きつと誰より上手に受け止めるよ

君の姿は僕に似ている

同じ世界を見てる君がいることで

最後に心なくすこともなく

僕を好きでいられる

僕は君に生かされてる」

この曲もいいよね。そこそこ昔の曲だけど、それでもかなりいい。

そろそろ帰ろうかな？ 時間もいい感じだしね。

家

それじゃあ寝よう。

## 第15問

明久 set

さてこの前試召戦争で勝ったおかげで教室の設備がAクラス相当になったのはいいんだけど

明久「あいっらはどこに行ったの!？」

雄二「外を見てみる。」

清涼祭の準備のために話し合うはずなのに教室に居ないFクラスのクラスメイトに疑問を抱いたところ雄二が質問に答えてくれたので外を見てみると

須川「こいやー!!」

横溝「俺のスライダーでお前なんか三振にしてやるぜ!!」

外で野球をやっていた。

明久「馬鹿なの? 雄二連れ戻さなくて大丈夫?」

雄二「大丈夫だ。今鉄人が捕獲しに行ったからな。」

なら安心だね。

西村「お前ら! 準備の時間中に何をやっている!」

須川「逃げろ！鉄人だ！」

西村「須川お前が発案者か！」

須川「違います！坂本と吉井が言い出しました！」

いい度胸だね。

雄二「あいつ、後でフルボッコな。」

明久「僕は後で外道麻婆豆腐こと、泰山麻婆食わせてやる！」

この後の結末を考えていればあんなことは言わなかったはずだと須川は後に語った。

明久「取り敢えず捕獲されてきたFクラスのクラスメイトたちで話し合いをしようか。」

雄二「なら、司会進行はお前に任せる書記は俺がやる。」

明久「了解。と言うことで何がいい？と、聞く前に僕から提案しようかな？」

須川「何にするんだ？」

明久「紅洲宴歳館・泰山」

須川「なんの店なんだ？」

明久「中華料理だよ。」

雄二「これでいいんじゃないか？」

お、雄二が味方してくれてる。須川に報復したいのは雄二も同じだからね。

その後紅洲宴歳館・泰山に決まった。

明久「そうだ、料理の試食なんだけど、須川君に頼んでもいい？」

須川「構わないが何でだ？」

明久「なんとなくかな？取り敢えず後ろにあるキッチンで一回作ってくるから食べてみて。」

しばらくして

明久「お待ちどうさま。」

須川「・・・吉井、これ、何だ？」

須川がそう聞くのも無理はないだろう。なぜならそれはラー油と唐辛子を百年間ぐらい煮込んで合体事故のあげく、『オレ外道マーボー今後トモヨロシク』みたいな料理だったのだから。

明久「奉山麻婆豆腐だけど？通称外道麻婆。」

須川「何で、」

明久「僕と雄二に罪を押し付けようとしたこと忘れてないよ？食べきってね？まあ余りの辛さに途中で気絶しても口を無理やり開いてねじ込むだけだけど。」

FFF団（（（これから吉井は怒らせないようにしよう。（（（（

これを食べ切れるのはアーチャーの記憶にでてきた言峰神父か切嗣さんだけだろう

けどね。僕も一応食べれるけど。

暫くして

須川「な、何とか、食べ……」( : 3 | 、 )

あ、倒れた。

一体の屍が出来上がった。

雄二「ありがとうな。明久、スッキリしたぜ。」

明久「ん？いいよ。僕もムカついてたし。取り敢えずこれは迷惑な客を追い返すよう兼食べたい人に出すようでもいいかな？」

雄二「食べれるヤツいるのか？」

明久「僕の記憶の中だけで2人かな？一応食べれなくもないけど僕は進んで食べようとはしないかな？」

雄二「そんなにいるのか。」

あの人たち凄いいよねー。これを普通におかわりするんだから。

冬木市近いしもしかしたら来たりして。

そう言えば今日括帆(かつほ)が家に来るんだっけ？引越しは再来週だけど、それまでは今の家で暮らすしかないんだよな。

暫

く

し





は引つ越すし、その少し前には勉強合宿に行かないといけならしいし、なるべく早めの方がいいけど、まあ、そこは色々あるから仕方ないか。みんながすっかり集まつてくれればそれだけで嬉しいしね。

康太「：そろそろ着く。」

明久「そうだね。家の近くに括帆は居るかな？」

ん？あれは、

そろそろ括帆も着いている頃だと考え、当たりを見渡すと、小柄で髪が長く色白の男子を発見した。

明久「いたいた。おーい！括帆ー！」

括帆「あ！アキーー！」

明久「ちようどいい感じだったかな？」

括帆「そうだね♪さっきまで学校行つてたの？」

明久「うん。学生だしね！学園長とか信頼のできる先生には事情を話した上で学校に通つてるよ。」

括帆「そつかく♪ところでさアキ隣にいる子は誰？」

明久「ん？ああ紹介するね。彼は土屋康太僕と同級生でクラスメイトで親友だよ。通称はムツツリーニ。」

康太「…よろしく頼む。」

明久「他にも後で今日は2人ほど来るからその時に紹介するね。」

括帆「わかったよ♪ムツツリーニ君はなんでそう呼ばれるようになったの？」

明久「寡黙なる性識者、ムツツリーニっていうのは簡単に言っちゃうとむっつりスケベから来ている感じかな？」

康太「…そんな事実は確認されていない。」

今までの行動を思い返して、そんなことを言うのは不可能だと思う。

康太「…それよりそろそろ中に入らないか？」

明久「あ、そうだね。」

色々話してたから少し時間がかかっちゃったね。あの研究所にいた時も似たようなことがあったのにまた同じことをしちやっただや。失敗したな。

室

明久「ここが今の所僕の家だよ。再来週にはみんなが集まることを母さんに相談したら家を用意してくれるって言ってたからそっちの方に引っ越すことになるけどね。」

括帆「わかったよ♪そういうえば恭二さんはいないの？」

明久「恭二は彼女も居るしね。普通に家で暮らしてるよ？」

自

括帆「そう言えば恭二さんは彼女いたんだったね。」

明久「純斗が知ったらなんて反応するかね。」

確か、その話をした時純斗聞いてなかったし。一応恭二は隊長なんだから話はしっかり聞いた方がいいと思うんだよね。

括帆「あれ？恭二さんが話してた時純斗も居なかった？」

明久「いたよ？話一切聞いてなかったけど。」

括帆「そういえばそうだったね。」

さてとそろそろ雄二達も来る頃だし一旦話すのもここまでにしようかな？

明久「そろそろ雄二達も来る頃だろうしご飯の準備しちゃうね。適当にくつろいでいいから」

康太、雄二達が来たらオートロック開けて雄二達通れるようにしといて。」

康太「…分かった。」

明久「2人は何食べたい？聞いた上で作れそうなら作るけど。」

括帆「僕は鍋系かな？」

康太「…すき焼き」

すき焼きか。現状、わりしたは作ればいいけど、お肉がないな。

プルルルガチャ

雄二『どうした？ 明久』

明久「あ、雄二？ 今日すき焼きにすることになったんだけど、来る前にお肉買ってきてくれない？ 帰る途中に業務スーパーあったですよ？ そこで二パック位牛肉買ってきて欲しいんだけど、後でその分のお金は渡すから。」

雄二『普段お前には色々作ってもらってるからその位なら俺がだすから大丈夫だぞ。』

明久「いいの？」

雄二『ああ。』

明久「ありがとう。じゃあそんな感じでお願ひ。割り下とかは家で作っておくし野菜は家にあるから。」

お肉だけ切らしてたんだよね。魚とか使おうか考えたけどすき焼きに魚は合わないからね。魚は明日の朝ごはんにでも焼いて出せばいいかな？

雄二『分かった。』

明久「ありがとね。じゃあ来るの待ってるよ。」ブツツ

明久「それじゃあ、来るまでに野菜切ったり豆腐切ったりわりした作っておこうかな？。」

ガチャツ

来たね。ちょうど準備もできて後はお肉を焼いてからわりしたと水を入れていけば

いい感じだったからちようど良かった。

雄二「買ってきたぞ。」

明久「ありがとう。こつちも準備は完了してるからお肉に火を通して食べようか。」

食

事

中

明久「そう言えば紹介してなかったね、雄二に秀吉彼が括帆だよ。この前話してた僕たちの仲間だね。で、括帆赤髪の身長のかい方が雄二だよ。で、見ようによつては女子に見られなくもない男子が秀吉二人とも僕の親友だよ。」

括帆「んゝ雄二に秀吉だね♪僕は松川

括帆。どちらかと言うとアキの方の指

揮に入つてる感じかな？」

雄二「ん？どういう事だ？お前らの隊長は根本の筈だろ？」

明久「簡単に言うと、僕らの部隊は僕と恭二を含めて10人居るからね。僕の指揮で行動するか恭二の指揮で行動するかを部隊内で話し合つた時にそれぞれ4人づつで別れた感じかな？で、括帆は僕の方が良いって言つてたから僕の指揮で行動する感じだよ。」

雄二「なるほどな。それで括帆は何で明久の方を選んだんだ？」

括帆「んゝ？だつて、アキつて一人で突つ走つて無茶するタイプでしょ？危なつかし

いし一緒にいて支えたいと思つたからだよ♪」

そんなことは無いと思うんだけどな。一応皆に相談するようにはしてるし。

雄二「なるほどな、納得した。確かにこいつは一人で抱え込んで無茶するタイプだな。」

あれ？何でそれで納得できるの？僕は一人で抱え込んだりしないよ？

雄二「お前は普段から一人で抱え込んでるだろうが。」

明久「心を読むな！」

括帆「アキは危なっかしいからね、誰かがそばで支えないと多分すぐに無茶して壊れちゃうから。」

明久「この話は終わり！括帆は明日からどうするのかこの後決めてそれで決まったら寝るよ！明日だって清涼祭の準備はあるんだから！」

括帆「アキ達と同じ学校に通うつもりだよ？クラスは同じの方が嬉しいかな？」

明久「言うと思つた。分かつた明日朝になったら学校に着いてきて。そこで学園長に相談するから。」

括帆「分かつた♪それじゃあ寝ようか♪」

明久「うん。おやすみ」

括帆「おやすみ♪」

## 第16問

明久 set

括帆 「起きて、アキ。学園長のところに行くんでしょ？」

明久 「あと、10分……」

括帆 「起きないならイタズラするよ？」

括帆 (アキは朝はとことん弱いからね♪どんな風にイタズラしようかな？さすがに落書きとかはご飯作ったりって考えると洗うのに時間がかかるからダメだし、なら辛いものを口に入れるのもいいけど、逆にかなり甘いものを入れるのもありかな？)

括帆 「確か、カバンの中にイタズラに使うようであつた！」

練乳

括帆 「これを少し口を開けてその中に垂らせばいいかな？」

明久 「あつまぁー!!」

括帆 「アキ、早く起きないと間に合わなくなるよ♪」

明久 「ごめん。すぐ準備するね。」

括帆 「ご飯作ったりするのもいいけど、その前に顔洗ってきた方がいいんじゃない？」



明久「え？」

括帆にそう言われて洗面所に行き鏡を見てみると、口の端から練乳が少し出ていて、あんまり言いたくないけど、少しエロい感じがしてしまうような状態になっていた。

明久「よし。しつかり落ちたしベタつきも無くなったね。それにしても起きなかつた僕も悪いけどせめて他の方法で起こして欲しかったな。」

キッ

チ

ン——————  
さてと、今日の朝ごはんは買っておいた鮭は普通にグリル使つて焼けばいいけど、あと何作ろう。

普通に味噌汁？それか、だし巻き玉子？んく悩むのも時間かかるしどっちも作つちやおうか。

明久「括帆くできたから雄二達起こしてきてく」

括帆「わかつたよ♪」

その間に僕は皿に盛り付けしてテーブルの上に出しておこう。

秀吉「おはようなのじゃ明久。」

明久「うん、おはよう。」

康太「…おはよう。」

雄二「おはようさん。」

明久「うん、2人ともおはよう。取り敢えずご飯できてるから食べちゃって。その後僕は括帆連れて学園長のところに行くから。」

雄二「俺達もついて行くぞ?」

んゝそれはありがたいけど、

明久「迷惑じゃない?」

雄二「友達にそんな心配してんじやねえ。昨日言ってたひとり抱え込むって言うのはそういうところだぞ。」

括帆「そう言ってるんだから、一緒に来てもらえばいいんじゃない?」

明久「分かった。なら一緒に来てもらってもいい?」

雄二「確認するまでもないだろ?」

抱え込んでるって前から言われてたけど、その癖は中々抜けないもんだね。直そう直そうって思っても中々治らない。

こんなんだから色んな人から心配って言われるんだろうけど、どうすればいいのかな。

明久「じゃあ今が7時過ぎだから食べ終わったら準備して学園長のところに行こつか。取り敢えず僕はそのことを学園長の方に電話で伝えとくね。」

明久 set out

括帆 set

やっぱりアキってひとりで溜め込むよね。

雄二「なあ、ひとついいか？」

括帆「どうしたの？」

雄二「アイツのこと頼んでもいいか？俺らは学校では一緒にいることが出来るが、アイツが部隊として集まった場合俺らはアイツと一緒にいることはできねえからな。」

括帆「アキはさ、前からこんな感じだったの？」

「今までアキのことを聞いたことなんて一切無かったからね。この機会に聞いておいた方がいい気がしたんだよ。」

雄二「アイツからは何か聞いてないのか？」

括帆「アキは自分のことは全然話してくれないからね。」

雄二「そうか。アイツらしいな。ソードアート・オンラインに巻き込まれたことがあったんだ。昔、俺らは翔子の会社経由で何個かナーヴギアを貰って、ソードアート・オンラインをプレイしたんだ。」

括帆「アキも一緒に？」

雄二「いや、アイツはβ版テスターに当たったからな。アイツは元々持っていたんだ。それを知らなくてプレイした初日まだログアウトができなかったことを知らなかった俺はβ版テスターだったアイツと一緒に狩りに出たんだ。」

括帆「その時はまだお互い知り合いじゃなかったの？」

雄二「いや、あいつとは中一の時から付き合いだ。ゲーム内ではアバターの見た目を自由に変えられたからな。アイツも俺も見た目が全然違ったんだ。その上で俺は知らなかったがアイツにどうすれば良いのか教えて貰っていた。暫くしてからログアウトできなくなったことを知ってアイツと俺は始まりの街で、同じ場所に飛ばされたんだ。」

括帆「そこで初めてお互いが誰なのかを知った。」

雄二「ああ。アバターが自分の見た目に変えられたことで相手が誰なのかを理解してな。そこからはほかのメンバーも集めて攻略をして行ったんだ。3層ではギルドを立ち上げたりの。」

括帆「そろそろアキが来そうだね。」

雄二「そうだな。一旦ここまでにするか。続きは後で話す。」

括帆「ありがとうね♪」

括帆 set out

明久 set

明久「取り敢えず学園長には話したから今から学校に行くよ。括帆は制服持っていないから、僕の部屋にある元々僕の使ってた制服使って。」

括帆「アキはどれ使うの？」

明久「僕はさすがに下はズボンだけど、女物のを使うよ？」

さすがにスカート履くのは恥ずかしいし。

括帆「そっか♪ならありがたく使わせてもらうね♪」

明久「うん。いつまでも使わないものを閉まっておくより使う必要のある人が使った方がいいしね。」

取り敢えず学園長のところに行かないとね。

登

校

中

括帆「そう言えばアキの召喚獣はどんな感じなの？」

明久「普通に僕をそのままデフォルメした感じで投影魔術が使えらってただけだよ？」

括帆「投影魔術使えるの!？」

明久「うん。学園長に頼んで使えるようにしてもらったから。」

秀吉「ワシら完全に空気じやの。」

康太「…完全に蚊帳の外。」

括帆「僕も使えるかな。」

ごめん。秀吉に康太、忘れてる訳じゃないんだ後で話すから少し待って欲しい。

明久「学園長に頼めば括帆の能力からどれか使えるようになると思うよ？残りは腕輪になるだろうけど。」

括帆「なるほどね〜♪」

秀吉「括帆の能力は聞いたことがなかったのじやが、括帆の能力はなんなのじや？」

括帆「ん〜？僕は遠距離型だね。弓を生成すること、後はその弓を生成してその矢に属性を付与すること。後はスナイパーライフルを自由に作れる感じかな？」

明久「僕らの部隊では純粋な遠距離型は括帆だけなんだよね。僕も一応遠距離戦闘できなくは無いけど、やっぱり遠距離戦闘よりも近距離戦闘の方が得意だからね。」

括帆「なんで僕らの部隊は近距離型が多いんだろうね。他の部隊には3人は居るのに。」

明久「他の部隊と違って僕らは完全に正面からの戦闘言い方はかなり悪いけど、捨て駒扱いだからでしょ？純粋に光の属性のみを持った人員が欲しかったんだろうし仕方ないんじゃない？」

括帆「言い方かなり悪いね〜♪」

確かに自分でも理解はしてるけど、

明久「あんな所に対して言い方良くする必要ないでしょ?」

括帆「かなり言うね〜♪」

明久「ただ、その方が楽だしいいんじゃない? スナイパーが何人もいるよりスナイ

パーひとりではアタッカーの方が楽だと僕は思うよ?」

括帆「うん。確かにそうだね〜♪何人もいても戦場だと狙撃ポイントが特定される前

に移動しないといけないのに他にもいると移動しづらいし。」

明久「さてと、そろそろ着くよ。」

学 校、 学 園 長

室—————

学園長「取り敢えず状況は理解したさね。それで、他のメンバーが来た時はどうする

さね?」

明久「その時はまた伝えようと思います。」

学園長「分かったさね。取り敢えず手続きはすんでいるから教室にいきな。召喚獣の

武器もちゃんとやっておくから。」

明久「ありがとうございます、失礼しました。」

下――

明久「取り敢えずこれでOKだね。」

それにしても、清涼祭の準備してるのはいいけどうちのクラス勉強はしてるのかな。雄二達や姫路さんに島田さん以外勉強してるところ見たことないけど。

括帆「そうだね♪この後は教室に行く感じ?」

明久「うん。教室に行つて清涼祭の準備かな?」

室――

括帆「アキ・・・これつて本当に教室?」

明久「そう言いたくなる気持ちもわかるよ? 試召戦争に勝つたことによつてAクラス相当の教室の設備になつてるから。」

括帆「それまでつてどんな感じだったの?」

明久「何年も放置された山小屋。」

あれは酷かつた今にも体調を崩しそうだったし。

明久「取り敢えずこの後括帆のことを紹介するから先生が呼んだら入つてね。」

括帆「分かつたよ♪」



西村「今日から転入生が来る。今から紹介するから静かにしろ！」

F1「先生転入生さ女子ですか？」

西村「男子だ。」

F3「クソー!!」

西村「静かにせんか！入れ。」

括帆「こんにちは♪僕は松川括帆アキの親友だよ♪」

うん。自己紹介するのはいいんだけど、僕のことを話す必要はあったのかな？

西村「松川は吉井の隣の空いてる席に座れ。それでは、清涼祭も近いんだ、準備はしっかりしろ！」

明久「取り敢えず後は明日が清涼祭初日だからある程度下ごしらえしておいた方がいいよね。」

雄二「そうだな。頼めるか？」

明久「勿論。」

括帆「アキ、あつちに居る女子二人がめちやくちやアキのことを睨んでるんだけど、どうするの？」

明久「え？」

そう言われて僕はそっちの方を向いた。

「やっぱり姫路さんたちか。どうして睨まれないといけないんだろうね。流石に少しうざくなってきたけど、なるべく穏便に済ませたいしな。」

明久「取り敢えず今はほっとして良いよ。僕らは一緒に帰るし彼女たちが何がすることはないから。」

括帆「わかったよ♪ところで僕は何を担当すればいいの?」

あく括帆の担当って決まっていなかったね。

明久「取り敢えず僕と一緒にキッチンの担当してもらってもいい?」

確か括帆も多少だけど、料理は出来たはずだし何かしら手伝ってもらいたい。

括帆「いいけど、キッチン人足りてないの?」

明久「キッチンには僕と康太のみで回す感じになってたかな?」

括帆「なんで?」

括帆の疑問ももつともなんだけど、

明久「Fクラスの男子たちの欲望に対しての素直さは傍から見るととてもキシヨいからかな?特に今僕は女子なわけだし。」

括帆「なるほどね。」

雄二「取り敢えずそっちは今どんな感じだ?ホールの方はあらかた飾り付けが完了したんだが。」

明久「こつちもだいたい完了したよ。」

♪ ピーンポーンパーンポーン→

高橋『2年Fクラス坂本雄二さん、吉井明久さん。至急学園長室までお越しください。』

明久「何かあつたのかな？」

雄二「さあな。ただ、ろくでもないことつてのは確かだな。学園長からの呼び出しに  
関してはいいことがあつた試しがない。」

明久「そうだね。」